



SI0203 0004139		e ****3,55		TRENITALIA	
SOLO ANDATA		TARIFFA REG. SICILIA			
da	NOTO	MODICA			
via	///	cl		2 ^A	
ADULTI	KM 60			01/11/2005	
c. r. <0001626>					
COGNOME E NOME			NUMERO TESSERA ABBONAMENTO INTEGRATO (QUANDO RICHIESTO)		

上左: 切符自動販売機。右上: 行き先コード表。下: 切符(実寸大)。

印刷された内容を一通り確かめ、上手くいっただけと満足した。

そのうち次第に乗客も増え、彼等の行動を観察して切符に刻印をしなければならぬと気付く。そんなあれこれが格好の時間潰しにもなり、それほど待たされた気分にもならず、定時に到着した列車に乗り込む。ノートからの乗客は七、八人で車内は三割ほどの混み具合だった。

右(北)側に席を占める。順光線で撮影に好ましく思われたためだ。実際この見通しにそれほどの誤りはなかったけれど、車内が空いていたため反対側が写したいときは、周囲に迷惑を掛けることもなく移動することができた。そして以前にも書いたことだが、この列車も窓を開けて撮影できる。窓を開けたままの乗客も少なくないので、この点も気兼ねせずに済んだ。

各駅停車の駅ごとに、その名前を持参の道路地図で拾って現在位置を把握する。どうでも良いことだが、習性というか好みなのか、この方が安定感が高まる。Sampieri を過ぎると、南方に臙に霞む海が望見されたが、数分後に大きく右にカーブし、針路を北に変え内陸部へと進む。Scicli 駅を発車しトンネルを抜けると終着駅モディカだった。

列車から吐き出された二十名ほどの中に、旅行者はいたものの、観光客風の姿はなく、それぞれ行方が定まっているのか、数分のあいだに駅周辺から姿を消した。駅前には道路が多少幅広になっているだけで、広場もなければ、タクシーの客待ちもなく、観光案内所などまるっきりであった。

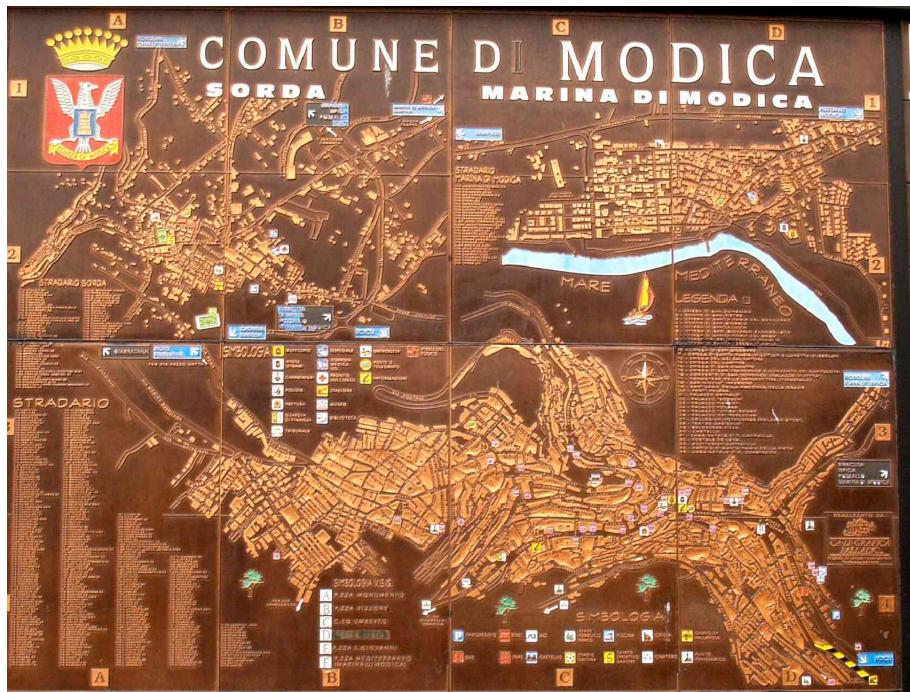
ノートの反省があるからホテルなどの道標はじっくりと探してみたものの、今回はなんの収穫もなかった。情報収集に利用できそうなパブ、バルも営業していないので、仕方なく繁華街と想定される方角へ歩き出す。

早過ぎるせいか、他の乗客も現れないため、利用法を尋ねることもできない代わりに、愚かな失敗をしたところで笑われることもない。モディカまでの料金ならば金額的にも知っているのだから、試してみることにした。

自動販売機の隣にある行き先コード表でMODICAを探し、左側の201を読み取る。販売機の中央にあるテンキーから201を入力すると、上部の液晶



上段: これまでシチリアでビニールハウスを見掛けなかったが、大規模にやっているとある。二段: Sampieri を過ぎてまもなく、遠くに臙気な海が。三段: 列車の終着モディカ駅。下段: 駅から見上げる自動車道高架橋。



制作費は高そうだが、役立たずの市街平面図。

緩い坂を下ること3、4分、ロータリーのある三叉路に出会い、右も左も商店や飲食店がぎっしり建ち並ぶ繁華街だ。より賑やかそうな左へ進むと、再び三叉路があるけれど、宿や観光案内所は依然として見付からない。

この辺りで市街平面図を見付けて、問題解決も近いかと期待する。しかし全くの外れで、何しろこの平面図をいくら仔細に見ても、現在

位置が判らないため進むべき方向を定めようがないのだ。これと同じ意匠のものはノートでも見掛けたけれど、その時は既に市街平面図を所持していたため、見流していたものだった。

5分ほど虚しい努力を続け、腹立ちだけが残った。B&Bの看板でもないかと裏路地に踏み込んで、これも空振りだ。まだ時刻は12時を廻ったばかりだし、天候も良好なため、追い込まれた気分こそなっていないが——— このまま右往左往していても仕方がない——— と思った。

無い知恵を絞って案じた策は、市街地図の購入だ。幸い近所に小体ながらも本屋があり、そのオバサンに電子辞書を見せて **mappa** を尋ねる。A1サイズくらいのを2€(289円)で入手できた。早速これを広げて、彼女に現在位置とホテルの所在を訊く。

好意的とは云えない反応であったが、それでも現在位置をマークすると亭主らしい男に訊いたりしてこちらの要望に応じてくれた。ホテルのありかは街外れに近いところだけれど、闇雲に歩くのと、目標があってでは距離感に雲泥の差がある。そして実際にはそこを目指して歩き始めると、200メートルも行かないうちに、マークが目に入った。ツキが好転したらしい。

観光案内所には若いカップルの先客がいたのが、すぐに終わりこちらに対応してくれる。改めてコンパクトな市街平面図を貰い、宿の所在を尋ねる。先程、本屋で教えて貰った以外に二つ、どちらも、より近距離の所にあるのは嬉しかった。さらにいつも通りにスーパーマーケット、インターネット・アクセスポイントとお勧めレストランを教わる。

一緒に貰ったホテルリストに載る宿は三軒、本屋が教えてくれたのは四つ星で、此处から一番近いのは三つ星、もう一つは二つ星なので、まず三つ星から当たってみる。観光案内所の面するメインストリートから狭くて急な路地を30メートルほど登ると小体な Hotel DeMohác の玄関があった。ガラスドア越しにロビーが見えるけれど、ドアはロックされている。

ドア横のインターホンに組み込まれた呼び鈴を押す。反応がないので繰り返していると、右後ろに人の気配がした。振り返ると路地を隔てた斜向かいの家から出てきたらしい中年男が近付いてきた。長めの黒髪は真っ黒で、濃い色のなすび型サングラスを掛けた風貌は、どこかホテルマンにはそぐわないシャープなものを感じさせる。不在の詫びを云いながらドアのロックを解除してくれた。

彼が先に立ちフロントへ行き、中に入るとサングラスを外した。下がった目尻に愛嬌があり、ついで

に山出しの純朴さが滲む。先程との落差があまりに鮮やかなため、笑いをこらえるのに苦労した。

空き部屋はあると云うことで、二階のそれを彼の先導で下見する。このホテルは風変わりな構造で、最初に踏み込んだとき、ロビーと思ったところは実はパティオで、上は青空天井、脇の方には高さ10メートルもある樹が三、四本聳えている。階段を昇って二階へ行くと、下からは天井に見えていた部分が4坪ほどのテラスになっていて、各部屋のドアはこれに面している。テラスは変則的で、狭い部分は幅1メートルもない廊下のようになり、供された部屋はこの部分にドアがあった。

狭い部類といえる部屋は、突き当たりがトイレとシャワーで、窓はない。片隅に置かれた TV は小型のものであったが、「衛星放送が受信できる」と説明する彼の口ぶりには、どこか誇らしげなものが感じられた。一泊朝食付きの料金は55€(7,957円)。

窓の代わりと云えば入り口のドアにはめ込まれたガラスだが、変則テラスの際まで迫った樹が、繁茂して鬱陶しい。しばらく思案した結果、部屋でのんびり過ごすのはバルコニー付きのノートで三泊も堪能したばかりと思いだし、モディカでは寝場所兼休憩所が確保できれば良いことにした。

チェックインを終えると既に1時近いので、食事へ出掛けた。観光案内所お勧めで、宿から2分の大衆食堂 A putia ro vinu を最初に尋ねたが満員、仕方なくこれもお勧めの Osteria Pozzo dei Pruni へ行く。ドアを開けると、幾分照明を落とした店内はひっそり静まりかえり、一人の先客もいない。

あまりに対照的な有様で —— よほど勘定が高いか、料理が不味いのでは？ —— と一瞬不安になる。しかし先走って云えばこれらは杞憂に過ぎず、観光案内所の情報は信頼するに値するものであった。

注文するときは懸念から脱却前のため、Ravioli di ricotta con sugo dimaiale(ラヴィオリとリコッタチーズ、豚肉ソース?)と赤ワイン1本だけに留めた。食欲もあまりなかったことだし。

そのうち客も二組ほど増えた。一組は親子三代と云った感じで子供は三歳くらいの女の子だ。東洋人の髭面が珍しいのか、度々こちらを見て時々ニコリ笑う。女性にさっぱりもてない者としては、たとえ幼女であろうとも笑いかけられて嬉しくなり、つい頬がゆるむ。頬笑みの交換は続き、そのうち親達も気付いて場に和やかな雰囲気が漂う。

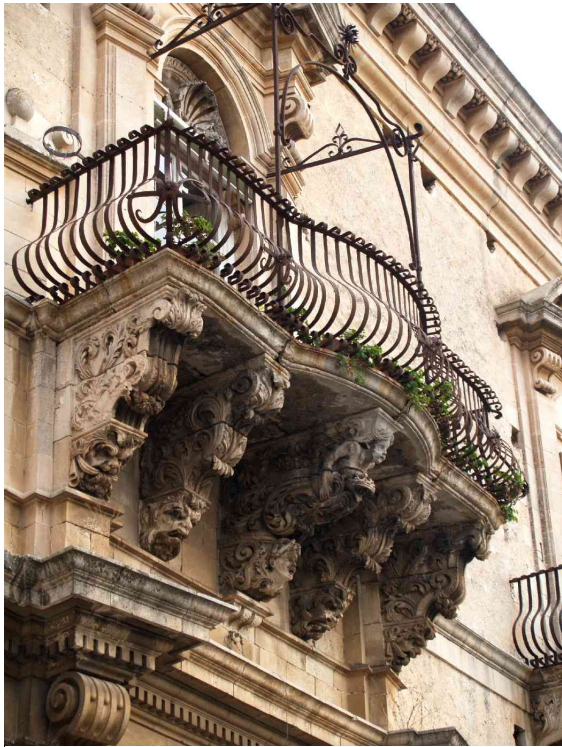
一時間足らずの食事を終え、勘定はラヴィオリ7€(1,013円)、ワイン8€(1,157円)だった。三代家族にも Ciao!と挨拶して店を出ると、この日は午睡をとることもなくそのまま街の探訪に掛かる。一番のメインストリートといえそうなコルソ・ウンベルト通りは、大きく蛇行しながら緩い上り坂が続く。

右に立派な前階段付きのサン・ピエトロ教会、次いで左に重厚なガリバルディ劇場、その先の右側に100段ほどの階段参道がある。これを登るとさらに50段ほどの前階段をもつ大聖堂サン・ジョルジョ教会が優雅なファサードを聳えさせていた。

内部には数人の観光客がいるだけでひっそりしている。後陣のトリプティック(三幅対祭壇画)は素晴らしいものと「芸



大聖堂サン・ジョルジョ教会内部。



ノートほど方々にはないが、バロックの見事なバルコニーがある。ナポリーノ・トマシ・ロッソ邸。

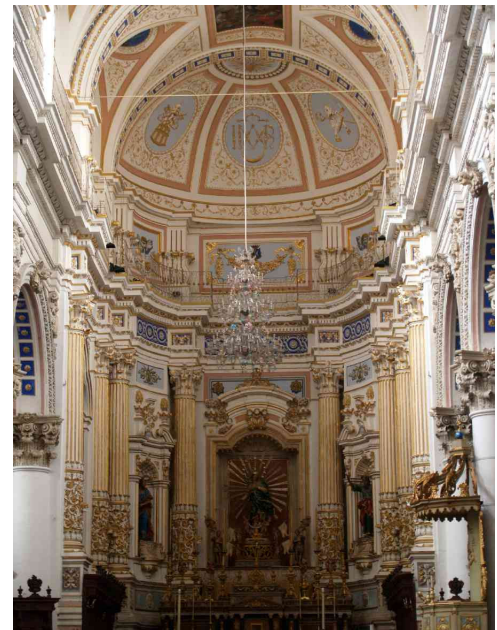
モディカ城(Castello della comtea di Modica)の前辺りから。右手に大聖堂のファサード、中央彼方に改修工事用のクレーンが見えるのがサン・ジョバンニ教会。

術と歴史の島「シチリア」に解説されていたが、鑑賞力の不足ゆえか、良く判らなかつた。

大聖堂を出てさらに坂を登り裏手へ出る。ほぼ水平に走る道路があり、この辺りにはナポリーノ・トマシ・ロッソ邸などの18世紀に建造された由緒ある建物が多い。それほど大規模なものはないから、地方貴族か地主などの館であったのか。

まだ廻ってみたいところは残っていたけれど、明日の楽しみに残し、戻ることにした。そうは云っても帰って何かをしたい訳ではないから、気になるところへ寄り道蛇行の連続だ。先程は外からファサードの写真を撮っただけのサン・ピエトロ教会も内部を見物した。3時という時刻のせいか、ミサは勿論、祈りを捧げる姿もなく、二、三人の観光客がいるだけだった。

一旦宿へ戻り、5時を廻ってからインターネットとツマミの調達のために出掛ける。観光案内所でマークしたアクセスポイントにはバルしかない。しか



サン・ピエトロ教会内部。

しガラス窓越しに中の様子を窺うと、片隅に何台かのPCが置かれているようだ。

中に入ってカウンターの中にいた女の子に尋ねると、—— アクセスポイントではあるが使えない —— みたいな反応で、しばらく不毛な遣り取りの末、カウンターから出てきた彼女のあとを行くと、なんのことはなく三台のPCが、全て使用中であった。



コルソ・ウンベルト通りの一番繁華な辺り。5時20分。



宿の前からモディカ城の時計台を見上げる。



宿の部屋に用意されていた糸針セット。これだけ充実しているのはかつて見たことがない。しかしいわゆるアメニティグッズではないらしいので記念に持ち帰るのはやめておく。

諦めてツマミの調達に行く。コルソ・ウンベルト通りからテデスキ通りが分岐する辺りが一番商店も多く、食料品店も此処にあった。3.1€(449円)購入したレシートは残っているものの、印字が不鮮明で書き込みもしていなかったため、内容は不明。ハムの類を購入したようだ。

宿へ戻り付くと、辺りはとつぷりと暮れ路地から垣間見えるライトアップされたモディカ城の時計台が印象的だった。この夜も静かに暮れる。



ブラスバンドの行進。

死者の日

11月2日も好天が続いていた。朝食のため一階に降りると、フロント嬢が出勤したところだった。明るくキュートな女の子だ。サングラスの彼が、流暢とは云えない英語で —— 明日は英語の上手い女性が来る —— と言っていたのは彼女のこららしい。

朝食を摂っていると表から荘重な調べが流れてくる。遠い上にドア越しだからはっきりしないものの、スピーカーから流された音とは違うようだ。9時になって街へ出ると、まもなくこの音楽の正体が半分判った。制服を着用した四十人ほどのブラスバンドが行進してきたのだ。「半分」なのはこの演

奏が意味するところがさっぱり判らないから。

後で観光案内所か宿で尋ねることにして、コルソ・ウンベルト通りを南西に向かい、適当なところで右折した。コルソ・ウンベルトは谷底のようなところを蛇行している通りだから、これを分岐すればどちらの側も急な斜面を登ることになる。大聖堂を谷越しに見たかったのだ。

細い路地はあいだに階段を挟み、時々交差する水平道路も、乗用車か小型トラックでなければ通れないような道幅だ。お陰で車に悩まされないだけでなく、庶民の生活臭が漂う雰囲気を楽しむことができた。



あいだに階段を挟んだ細い路地が続く。



谷越しに大聖堂を望む。

サン・ピエトロ教会。

細い路地にはいると、すぐに平面図上の現在位置は把握できなくなった。しかし地形は単純だし、ランドマーク的に大聖堂は良く見える。そんなことで「ともかく上へ向かって」、10分弱歩くと、丘陵の頂き近いところを水平に結ぶ相互一車線の準幹線道路に出た。さらに見晴らしの良い場所を探し、この道路上を移動しながら、大聖堂の写真、レンズを長焦点ズームレンズに替えてサン・ピエトロ教会の写真など、15枚ほど撮影する。

「水平道路」をしばらくうろうろし、結局コルソ・ウンベルト通りへ戻ることにした。同じ路地は面白くないので少し西側にずらし、後は上り同様ごく適当にルートを決める。行く手を遮る洗濯物に—— ハテ、どこかの庭先に迷い込んだか？ —— と思ったら、れっきとした道路で、さらに干し物を追加中のバアサンが、笑顔で「どうぞ、どうぞ」と云うのに挨拶したり、愉快的歩きだった。谷底を横断して再び坂を登る。

短時間ではあるが大聖堂を再訪し、次いで目指したのはサン・ジョバンニ教会だった。それほど由緒があるとは思えなかったが、何しろ小高い丘の上に位置するため、モディカを歩いていると度々目に入る。気になるので一度そばでじっくり見たいし、小高いところ故の眺望でもあれば儲けものだ。

のんびりと辺りに目を配りながら歩いても、20分掛からずに辿り着いた。規模も小さく、意匠に特筆するようなものもなく —— あまり期待せずに良かった —— 程度。入り口は閉ざされ内部を見ることもかなわず、高台からの眺望もさっぱりであった。

しかし境界の路地は下町の雰囲気漂い、しばらく辺りを彷徨ってみた。



左上：大聖堂のファサード。右上：郵便箱。石造りの建物に後から取り付けたため、後ろ側ではなく、手前から郵便物を取り出すようになっている。左下：サン・ジョバンニ教会。右下：サン・ジョバンニ教会境界。



サン・ピエトロ教会の前階段で棺が担ぎ降ろされる。

サン・ジョバンニ教会界隈からそのまま馬の背状の高台を適当に歩いて行くと、いつの間にかサン・ピエトロ教会の裏手に出た。突然教会の中からパイプオルガンの響きが漏れ聞こえてくる。—— ミサが行われているのか？ひょっとするとコンサートでも —— の期待が湧き上がり、足を急がせて横手にある入り口に向かった。ドアを押し開けると、中には大勢の人が着席し、涙ぐんでいる横顔が多数見える。

状況を冷静に観察する間などないまま、慌ててドアを閉める。しかし何が進行しているのかは気になり、正面へ回り込んだ。教会の外に溢れる人々の様子からすると、葬儀が執り行われているらしい。そのような場へ闖入することが許されるとは思わないが、シチリアの葬儀様式には興味が湧き、コルソ・ウンベルト通りを横切って向かい側に行き、アーチの中から望遠レンズで観察した。

まもなく正面の大扉が八の字に開かれ、花で覆われた柩が担ぎ出された。教会内にいた会葬者もその後続く。表で見守っていた人々も合わせれば数百名だ。よほどの有名人、有力者か、その親族の葬儀なのであろう。

死者の日（２）

一旦宿へ戻り、暫時のトイレ休憩後再び街へ出る。この日の昼飯は A putia ro vinu に再挑戦するつもりだ。どれほどの店か判らない

けれど、「満員のため入れなかった」ことは、釣り逃した魚と同じでどうしても大きく見えてしまうのだ。

時刻がまだ早いのは承知の上で、店の前まで行くと、ドアが半開きになっている。中に入って、片言の英語しか話さぬ女将に電子辞書の prenotazione(予約)を見せて、何とか意志が通じたところで、名刺をアルファベット印刷面を上にして渡した。

首尾良くテーブルの確保はできたものの、開店まではまだ1時間以上あり、時間潰しを兼ねて観光対象とはなっていない(市街平面図に特記のない)辺りを散歩することにした。手始めに裏道を辿って駅へ。明日利用するかもしれない道筋だ。



A putia ro vinu のある pisacani 通り。

昨日同様、駅前には人通りもなく殺風景であったが、日本でも一日数本しか列車の運行されないローカル線の駅では、よく見掛ける雰囲気だ。駅と大聖堂やサン・ピエトロ教会のあいだに、割り込むように隆起している丘陵を見上げると、さほど大きくないものの瀟洒な教会が見えた。

教会とそこからの眺望に、淡い期待を抱きつつ登ってみた。どちらもかなえられたとは言い難いけれど、とにかく適当な時間潰しと運動にはなった。その辺りで引き返す。食堂の前へ戻り付いたときは、開店時刻の1時半になっていなかったが、店内に客らしい人影が見えたので、そのままはいる。

入ってすぐの小振りな丸テーブルの上に、先程残した名刺が置かれていたので——席は此处か——と見当はついたが、しばし待つと女将が顔を出した。紙に書かれたメニューはなく、定食が三種類くらいあるらしい。(通じていれば)「お任せ」の定食にする。

席で寛ぎ、改めて店内を観察した。先客は作業衣を着た職人(大工、左官その他建築関係)風の青年四人で、此处の常連らしい。サラダが盛られた大鉢をカウンターの中から持ち出して、自分たちの皿に取り分けるなど、半ば我が家で食事をしているような雰囲気だ。

内容の判らなかつた定食は、アンティパストとしてまず三皿。小鉢に入って、茄子、ピーマン、トマトの炒め煮、平皿で、チーズ、卵焼き、ライスロケ、焼き茄子、チーズとパンを併せて揚げそれにドレッシングであえた刻みトマトを乗せたカナッペ風、そして小皿に乗った茹で卵だ。

豪華さこそないけれど、味わいは素朴で美味かつたし、量が少ないことも有り難い。パスタの方は「スパゲッティを使ったオジヤ」を思わせるもので、土鍋で運ばれてくるのも、何となく嬉しい。お代わりを繰り返し、ついつい量を過ぎてしまった。雑炊系が好きと云うこともあり、これにも満足。



A putia ro vinu のアンティパスト(上)と土鍋で供されたパスタ。



上: 僅かに黄昏れ始め、赤味を帯びてきたカテドラル。3時56分。下: 気分転換に撮ったモディカ城時計塔。下から見上げてみると、建物の一部分に見えるが、独立しているようだ。

来店者は途切れず、半時間経たずに満員になった。昨日の満員は「当然」ではないにしても「頻繁」なことだったかと納得する。一時間弱で食事を終え、料金はピッコロ(0.5%)のワインを含んで10€(1,447円)だった。宿へ戻って食休み。

3時半になり、再び外出する。———対する丘の上から午前中に撮影したカテドラルなどは、光線の加減に不満があった。今ならばもっと良くなっているかもしれない。———ことを一応動機とするが、有り体にいえば、他にすることも行くべき場所もなかったのだ。

丘陵肩部分を走る水平道路まで上がると、午前中の逆光線が、今は左後方からのものになっている。しかしいざ写真を撮ろうとすると、背景の雲と青空がほど良い塩梅になっているときには、肝心のカテドラルが流れ雲の陰に入っていたり、とかくどこかに不満が残る。

これが動きのない状態であれば、早々に見切りを付けるのであろうが、なまじ雲が動いているために。———ひよっとしてもう少し待てば...。———の期待が生じるから始末に悪い。20分ほど待ち、その間にレンズを長焦点ズームに替えて気分転換しながら辛抱し、計11枚ほど撮影して、ようやく見限る決心が付いた。

ちなみに今その11枚を見較べれば、3時56分に撮った最初の一枚が一番ましなようだ。ところで20分が長いかわい短いかは議論の分かれるところだろう。たしかに20分どころか、20時間、20日などの長い忍耐を経て、傑作をものにした写真家は多い。しかしそれは才能ある人の話で、「下手な鉄砲」はいくら撃っても当たらないことが多いのだ。

水平道路を北へ向かって歩く。旧市街の中心部を見下ろし、あるいは向かい合う丘陵斜面として眺めるのは面白かった。谷底部分の奥まったところにある四つ星ホテルは、上から観察する限りでは泊まらなくて良かった。このクラスらしくプールなど備えていることも、この時期になんの有難味もなく、ロケーションや(想像される)部屋からの景観などはどちらも低い評価になるし、それで四つ星の料金を取られては誠に詰まらない。

谷底が終わりになり、せり上がってきた道路が水平道路に繋がる部分まで行き、その先は見るべきものもなさそうなので引き返す。今度は丘陵部の南端まで行き、車道を離れて入り組んだ路地を

適当に下った。いずれにせよ辿り着くはずの
コルソ・ウンベルト通りに出た。

時刻はまだ4時半だけれど、散策にも倦んで切れている酒を調達したら帰ることにした。ウンベルト通りならば酒屋かスーパーマーケットを見付けることは簡単と思っていたが、昨日利用した食料品店を始め閉まっている店が多い。時刻が早いので気分的に余裕があり、商店街見物も兼ね広範囲に探してみた。

サン・ピエトロ教会前を通りかかると、手編みの籠を実演販売している。興味は惹かれるけれど、嵩張りすぎて買うことはできない。写真だけ撮らせて貰おうと、許可を求めた。にこりともしないが、怒ることもなく淡々と肯く。4枚撮影。

余裕を持って始めた酒屋探しは一向に収穫がないまま黄昏始める。間近に観光案内所があったからこれを利用した。しかし答えは —— 多分開いている店はない —— というものであった。何か物日なのかと重ねて尋ねて、聞いても判らないので書いて貰った。Morti と書いてそれでも判るまいと思ったのか Dead's day(死者の日)とその下に書いてくれた。今朝流れていたブラスバンドの響きは、この日の訪れを告げるものであった。

もしかしたら開いているかもしれないと教えられたスーパーマーケットに向かいながら、次の手立てを考える。モンレアーレ同様バルで買うのが手軽であろう。そのようなつもりで開いているバルをチェックしながら行き、結局駄目だったスーパー前でUターンすると最寄りのバルに入った。

客が誰もいなかったのも頼みやすい。壘売りを断られ、他を当たるより量り売りを選んだ。ウオッカをダブルで5杯、持参のペットボトルに詰めて貰う。バーテンは渋い顔をしたが、重ねて頼むと渋々引き受けてくれた。ミネラルウォーター(炭酸)200cc0.8€(116円)もついでに買い、ウオッカは12.5€(1,809円)だった。随分割高とは思うものの、無いよりは良い。

シチリアのタクシー

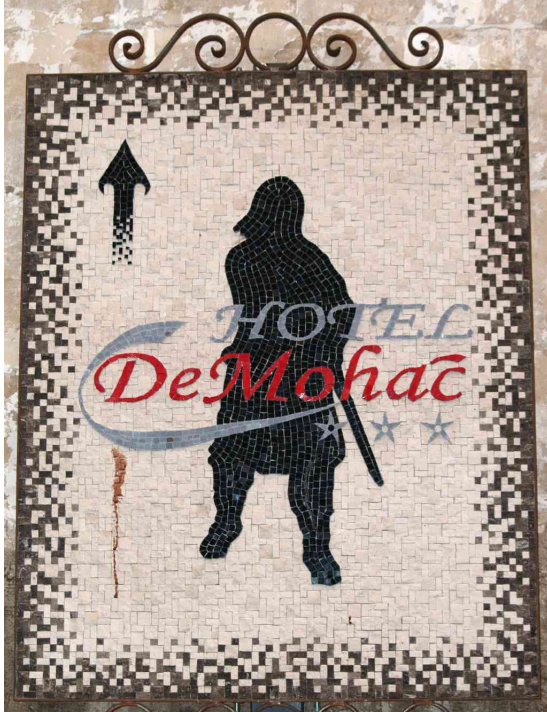
11月3日も好天が引き続いている。ほとんど隣町といって良いラゲーサへの移動は、当初列車を考えていたが、タクシーの利用も検討する。パレルモの馬鹿に割高な料金は、シチリアの標準なのかもう一度確認したい気持ちがあったからだ。

フロントにはこの日も昨日のキュートな女の子がいる。彼女にラゲーサまでのタクシー料金を尋ねると、案に相違して知らないという。しかし見放されたわけではなく、早速タクシー会社に電話して —— おおよそ15€(2,170円) —— と聞き出してくれた。距離がおおよそ15キロであるから、スペイン並みで、日本よりは割安になる。

タクシーで行くならば観光案内所へ乗り付けるのが良からう。運転手に指示するのに informazioni turistiche で通じるかメモに書き込んだものを彼女に見せた。



サン・ピエトロ教会の前で手編みの籠を売っている。



宿の案内看板。

これは電子辞書から調べたもので、実は今まで再三利用して、どうも通じ方がおかしいように感じていたものだ。彼女は否定こそしなかったが、別の言葉を口にする。改めて書き込んで貰うと *ufficio turistico* だった。

話のついでに、宿の看板や名刺に使われているシルエットのことも訊いてみた。中世の英雄でこの地方を活躍の場としたらしい。名刺に書き込んで貰った名前は *Au Altero DeMohác* で、このホテル名と同じだった。

10時ちょっと前にチェックアウトする。前日調べておいたタクシー乗り場までは徒歩2分。順調なのは此処までで、肝心のタクシーがない。正確に言えば車はあるけれど運転手が居らず、傍らに

客らしい上品な老紳士がもどかしそうに立っている。もう一人(客とも通行人ともさだかではない)オヤジがいて、開け放たれた運転席の窓から手を差し入れクラクションを鳴らし、運転手を呼ぼうとしている(らしい)。

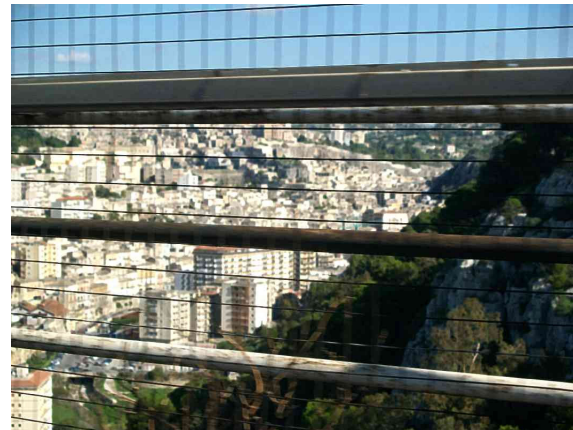
数分経って運転手が現れた。大柄な七十男で禿げ上がり、目はなぜか蛙を彷彿させる。異相といって良いだろう。紳士を待たせて用事を足していたのか、あるいは紳士が用事を足しているあいだに、ふらふらといなくなったのか。

ともかく発車という段階になって、タクシーを利用したいこちらの存在に気付いた。何かいったのを推察すれば ——— すぐ戻って来るから、此処で待ってくれ ——— だろう。クラクションを鳴らしていたオヤジが口を挟み、そのまま同乗して紳士の目的地を経由後こちらの望むところに行くことになった。

そのオヤジも含め四人を乗せて、車は走り出した。BMWの超高級車で座席は革張りだ。紳士の目的地はモディカ新市街にある総合病院で、10分ほどで到着すると15€(2,170円)支払い去っていった。ラグーサまで15€は無理かとの懸念が発生する。出発のどたばたで、通常ならば行う値段の確認や交渉はしていない。

ともかく成り行きにまかせ、ドライブは楽しむことにし、紳士が降りた助手席へ移動する。天気晴朗で景観が良く、超高級車で快適な道路をひた走る。同乗者に不満はあるものの、まずは最高のドライブといえよう。ちなみに正体不明のオヤジは黙然と後部座席に坐っている。

それでも高架橋やラグーサ・イブラなどの見所に差しかかると、彼か運転手が口々に撮影を勧めるのだった。



上:モディカ駅近くの高架橋(P.86)から街を見下ろす。
中:モディカを離れて数分、115号線が右へ分岐する。
下:ラグーサ・イブラ。中央部に修復工事中的の大聖堂。

ラグーサ・イブラは青銅期時代以来という説もある古い街で、16、17世紀に大地震により被災した後、1キロほど離れたところに開かれた街がラグーサ・スーペリオーレだ。こちらはビルも多く、道路網も碁盤の目状に整備されている。

ラグーサ新市街に入り改めて運転手にメモの *ufficio turistico* を示す。こちらの街中には不案内らしいが、地元の人に尋ねればすぐ判ることと楽観していた。しかし客待ちをしているタクシー運転手に尋ね、道行く人に訊き、さらには後部座席のオヤジが徒歩で情報収集を始めても思わしい結果が出ない。

挙げ句の果ては、驚いたことに走ってきた路線バスを停車させて運転手に訊いている。それでも判らず最後は商店主に質問して自信ありげに帰ってきた。脇道に逸れ数十メートル行くと、およそ観光案内所らしくない役所風ビルの前で停まった。

こちらの疑わしげな表情を見て、運転手が同行し玄関を入る。それらしい窓口もないまま、彼が通りがかりの男に尋ねると——— 此処にあるのは県の観光課(みたいなもので) *ufficio turistico* はラグーサ・イブラへ行かなければならない ——— みたいな話になった。

思わしい展開ではないものの、タクシーを利用した有難味は増してきた。荷物を引っ張り言葉の通じない街を彷徨う惨めさに較べ、イタリア人の運転する車で移動する効率よさは格段だ。それに費用がかかっても仕方ないと思った。

いざイブラへと100メートルほど走ったところで、の道標を発見し、気付かぬ運転手に車を止めさせる。矢印は左を指していた。しかし彼が通りがかりの女の子に尋ねると、右にあるという。尋ねたついでにそこまでの案内を頼んでしまったのは、こちらの感覚からすれば厚かましいようにも思われたけれど、シチリア流はこうなのかもしれない。

タクシー料金を清算する。40€(5,787円)は高いとも思ったが、交渉する気力もなかったし、紆余曲折を経たことを思えば、それなりに納得できる部分もあった。

女の子二人の案内は2、30メートルのことで、確かに観光案内所があった。礼を述べると彼女たちは逆の方へ去って行く。待たされた上に、僅かな距離にせよ回り道までしてくれたわけで、シチリア人の親切さに感謝する。

案内所は十坪ほどのフロアに、カウンター一つと事務机四つが置かれ、四人のスタッフと利用者ではない髭面の中年男がいた。スタッフはほとんど英語を喋らず、髭男が対応あるいは通訳してくれる。市街平面図その他一式の資料と情報を入手できた。

比較的大きな街なので、歩き回らず此処で宿を確保することにした。スタッフお勧めのホテルは電話してみると満室か休業で駄目。それならばと中年男が ——— これは良い宿 ——— と提案した駅前のレストランで電話予約が成立した。

彼が市街平面図に書き込んでくれる。単に宿の位置をマークするだけではなく、案内所から



走ってきた路線バスを止めて道を尋ねる。



観光案内所を示す道標。実際には逆方向にあった。本文中で左と書いたのは、この道標を反対側からみたため。



ラゲーサ・スーペリオレの中心部に穿たれたサンタ・ドメニカ溪谷には三つの橋がある。一番上流側から撮影。真ん中の橋は、現在歩行者専用になっている。街の創建と共に架橋されたと想定される古いもの。案内所から宿へはこの橋を渡った。



サン・ジョバンニ・バティスタ大聖堂。

二つのラゲーサは隣接しているが、それぞれ独立した丘の上にある。スーペリオレの外れには展望台が設けられ、まず此处から相対する丘のイブラを偵察する。

丘の頂部近くに見えるキューポラは大聖堂であろう。しかしそれよりも古い石造りの家々が建ち並び、曲がりくねった路地が巡っている有様が魅力的に感じられた。実際に踏み込む前に、想像の散策をしばし楽しむ。

の順路を矢印で書き込みながら、その地点の特徴を説明する。念の入れように感服した。

彼とスタッフ全員に礼を述べ案内所を後にする。懇切丁寧なガイドのお陰もあり、迷うことなく目指すホテル・ジョニオに辿り着いた。鉄筋コンクリート四階建ての、部屋数はそこそこありそうだが、草臥れ果てた感じがするホテルだ。

ともかく中に入り部屋を見せて貰った。エレベータはなく、階段を登って行くと、四階へ通じるところは鎖で閉ざされている。雨漏りでもするのかもしれない。部屋の設備も旧式で三つ星にはいささか不足とも思うが、一泊が30€(4,340円)ではこの程度か。向きは裏側に面し、騒音は心配せずとも良さそうだ。安宿も好きだから、此处に二泊することにした。

高級レストラン・ドウオーモ

チェックインして一休みの後、街へ出た。色々あったのにまだ12時前なのは、タクシーの機動力ということか。ラゲーサ・イブラを目指すのが、順路に観光案内所があるので、ドアを開け、無事に投宿できたことを一言告げた。逆の立場に置かれたら、自分が案内した結果は気になるから。

案内所に正対する大聖堂も気になったけれど、旧市街訪問がまず第一と、九枚撮影したのみで先を急いだ。



ラゲーサ・スーペリオレの外れにあるサンタ・マリア・デッレ・スカーレ教会付近からラゲーサ・イブラを望む。

一気に坂を下ると、イブラの入り口を守護するようにデラ・アニメ・デル・プルガトリオ教会がある。派手なところはないものの、品格のある外観だ。前階段を上り、正面入り口の扉を押してみたが、固く閉ざされていた。

緩い上り坂を蛇行しながら辿る。右側にある古い石造りの集合住宅が、改装されてホテルになっている。元の構造を最大限に残したためか、フロントから部屋へ通じる廊下はなく、路地を通して各部屋ごとの玄関から入るようになっていた。

まもなく前方に大聖堂のキューポラが格調高い姿を見せる。路地の左側に、瀟洒なレストランを見つけた。どこか気になる雰囲気ながら、まだ開店前だった。50メートルも行くとドゥオーモ広場へ出る。正面から見る大聖堂のファサードは、全面工事用の足場と防護ネットに覆わ



左上：デラ・アニメ・デル・プルガトリオ教会。屋根の上に置かれた鐘を突く仕掛けが素朴で頼みましい。右上：スーペリオーレを振り返る。左下：大聖堂のキューポラ。右下：大聖堂は修復工事中：

れている。またしても改修工事だ。

辺りに観光客の姿が目立つようになった。スーペリオーレからわざわざ徒歩で訪れる人は稀で、車で直接イブラへ来れば、駐車場はこの広場から先にあるためであろう。広場の外れで観光案内所への道標を見付けた。

一本裏手の通りにある小さな広場に面して案内所はあった。二十歳くらいの可愛い女の子が対応してくれる。手持ちのとは違う市街平面図が用意されていたので貰い、——— この界隈で典型的シチリアあるいはラグーサの料理を供するお勧めレストラン ——— を尋ねた。

彼女は平面図のポーラ広場付近と、大聖堂の横を抜ける路地を指した。後者を指すとき喋ったことは、充分聞き取れなかったが important の一語を含んでいたようだ。そしてその路地にあるレストランならば、先程目星を付けたところに違いない。そろそろ開店する時刻になったことだし、彼女に礼をいうとその店へ向かって歩き出した。



上：観光案内所の玄関脇にあったモザイクの美しい看板。下：レストラン・ドゥオーモで坐ったテーブルから入り口を見る。



上の四品はアンティパスティ的なものだが、注文はしていない。メモには左上の品がジャガイモとタマネギ、右上がタマネギ、パン他と書かれているが、ほかの品については記載なし。下はサラダ、ツナとボラの魚卵の pasta。

ゆっくり歩いても5分かからずに店の前まで辿り着く。先程店の名前が判らぬまま通りすぎたので、今度は落ち着いて見れる。ドアの曇りガラスにアールヌーボー風の美しい絵が描かれ、そこに Duomo の文字が記されていた。

中にはいると先客は誰もいなかったが、初々しい感じを残すウェイトレスが笑顔で迎えてくれた。四坪ほどの小部屋に四人掛けの丸テーブルが二つ。しかし(確認したわけではないものの)部屋は他にも複数あるらしく、種々のスタイルで会食ができるようだ。

奥の丸テーブルに着く。すぐそばのドアは開け放たれ、緑豊かな裏庭が眺められる。奥から「給仕長」と云った感じの貫禄ある男性が、メニュー片手に悠然と現れる。

笑みを絶やさず、歓迎の言葉を述べ、メニューとワインリストを置くと、泰然と去っていった。

彼が流暢な英語を喋っていることから、英語での対応が可能なのは明らかなのに、メニューがイタリア語のみなのは格調を重んじるが故なのか。ともかく電子辞書その他を総動員しての格闘が始まり、しばらくして様子を見に現れた彼には、状況を示して —— とにかく時間が掛かる —— と身振りで伝える。給仕長は、「どうぞごゆっくり」といった感じを笑顔で残し奥へ去った。いかにも高級レストランの洗練されたサービスだが、チノパンツにスポーツシャツ姿の風来坊には、いささか居心地悪くも感じられるのだった。

イタリア語メニューに苦労しつつも、有り難かったのは定価が明記されていることだ。ノートのレウラーエみたいにて全て「時価」では、食べ物も喉を通り難くなるだろう。ともかく(想像した)内容と、価格からツナの pasta、アンティパスト替わりに(メニューには載っていない)サラダ、そしてワインはこれまた価格をみてピアノグリッロ(社)がドゥオーモのラベルを付けて出している赤ワインにした。

バランス的におかしい取り合わせとも思うが、給仕長は「結構なご注文」と云った表情で、伝票に書き込んでゆく。流石というべきか。

ほどなく注文はしていないお通し風の食品が、量的にはたっぷり出てくる。これにもまた悩まされる。ガツガツと全部空にすべきではないように思う一方、食べ残しが他のテーブルに廻るはずもないと思えば、食品を捨てることに罪悪感を感じるし、そしてそれぞれの皿が旨いからどこでやめるか迷うばかりであった。

何とかこれを乗り越えて、トマト・サラダそしてツナの pasta に辿り着いた。それぞれの美味は間違いはないけれど、好みでいえばもっと素朴で良いと思う。勿論この店のような高級レストランでは、単



デザートも豊富な品揃え。

純な「素朴」は許されないであろうが。

浮き足だったところはあったけれど、一時間の食事は楽しく経過した。店の内装や雰囲気に対し、流れてくる音楽がジャズというのも不思議な感じがしたもの、なぜか治まりがついてしまう。店の運営者が絶妙のバランス感覚を持つのか、はたまた単なる偶然か、良く判らなかつた。

最後はカプチーノ。この時点になると、デザートが七種類配されているのも当然と思う。その代わりカプチーノの料金も3€(434円)と、巻の二、三倍だ。その他料金はワイン25€(3,617円)、ミネラルウォーター3€(434円)、トマト・サラダ12€(1,736円)、ツナの Pasta 17€(2,460円)で、合計60€(8,681円)だった。日本に較べ食の費用が安いシチリアなので、今回の旅では最高額の出費となった。

ちなみに他の食堂では必ず請求された Cperti(席料)の項目がない。豊富だったアンティパステイやデザートも同様だ。せこいことをカウントせず、鷹揚に高めの単価で請求するということか。

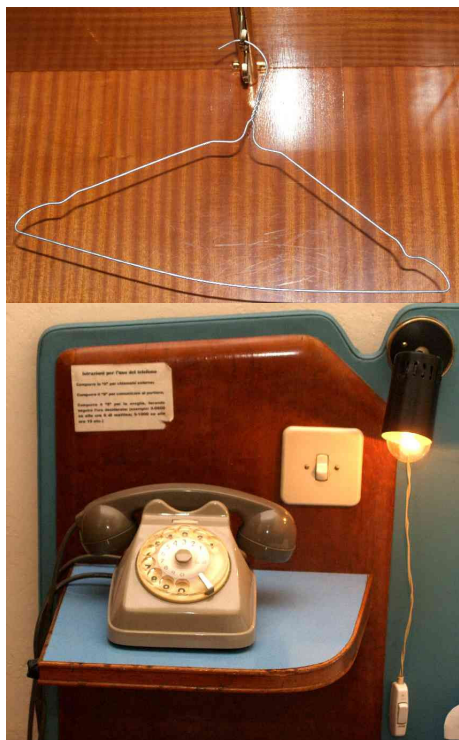
充足した気分のレストラン・ドゥオーモを後にする。時刻はまだ2時なのでモディカの宿を出てからたった4時間しか過ぎていないのに、タクシーの思わぬ展開や、観光案内所探してやきもきたせい、同じ日の出来事とも感じられない。



左:サン・ジョセツペ教会のファサード上部。右:イドリア教会。

ともかく旅の一日分としては充分な経験をした気分になり、ぶらぶらと宿へ帰る。ポーラ広場まで行き、サン・ジョセツペ教会を見ながら右折し、この辺りの大衆食堂も面白そうと目星を付けたりしながら、イブラの南側を巡る路地を通してデラ・アニメ・デル・ブルガトリオ教会、後は来るときの道を逆に辿った。

シャワーを浴びてからしばしの午睡を取り、5時半に酒とツマミの調達に出掛ける。スーパーマーケットは宿の玄関から100メートルも離れていない。ミネラルウォーター(炭酸) 1.5ℓ 0.22€(32円)、ミネラルウォーター2ℓ 0.31€(45円)、ジン6.85€(991円)、キュウリのピクルス 290/150 1.34€(194円)、ヨーグルト125g 2個0.42€(61円)、パン182g 0.99€(143円)、チーズ200g 0.99€(143円)、ハム100g 2.35€(340円)、そしてシチリアで始めて見掛けたグレープフルーツジュース1ℓ 1.2€(174円)、レジ袋0.05€(7円)など。



上:洋服ダンスに置かれた針金ハンガー。これほどまで痛めつけられたのを見るのは初めてだ。下:ベッドサイド。リニューアルの努力が完全に放棄されている。

この日も平常通り晩酌で一日を締めくくる。呑みながら徒然なるままに電子辞書を開き「世界の料理・メニュー辞典」の「イタリアの料理」を拾い読みしていると、なおざりにはできない記述を発見する。以下はその抜粋引用

ただし、一番目の料理のパスタだけで食事を終えることだけは絶対にやめること。日本人にとってパスタはそばやうどんのような存在であることは判るが、イタリアではパスタはあくまでもスープと同列。レストランに入ってスープだけ飲んで帰る人は、大マナー違反といえる。

なんということだ。もしこれが本当ならば、我が食事は本日の昼食を始め、マナー違反の連続だ。しかしこの電子辞書は広辞苑や英和、和英辞典などを別にすると、出典や著者が不明な、信ずるに値するか否かを判断する情報のない、その意味では怪しげなものなのだ。

居心地の良いとは云いかねる部屋での晩酌でも十分に酔い、そして静けさに関しての問題は全くなかったから、熟睡することができた。

公衆トイレ

明けて11月4日、曇りの朝だった。買い込んでおいたパン、ヨーグルト、ハム、チーズなどを、部屋で朝食替わりにつまむ。早く出掛けても時間を持て余しそうなので、収集した資料やレシート類の整理に時間を費やし、9時近くになって外出した。

最初にラゲーサ駅をチェックする。徒歩5分で駅舎に辿り着き、次の目的地カルタジローネへの列車が、調べておいた7時42分で間違いないことを確認した。タクシー利用には懲りているし、それでなくても距離が長すぎる。バスは調べなかったけれど、列車利用に格別の不満がない現在、そこまでやる気にもならなかった。列車の方が好みなのだ。

駅から徒歩5分ほどのデル・エチェ・オモ教会へ行く。スーペリオレは新しくできた街とはいえ、イブラに較べればの話で、この教会も1842年の創建だ。ドアが開かれていたので、中を覗いてみるとかなりの人数がミサの最中であつた。金曜日の朝9時に、どのような人々が集うのであろうか。

邪魔をせぬよう静かに退出し、数百メートルの所にある大聖堂を訪れた。昨日、先を急いで外観のみで通り過ぎたため、気になっていたのだ。しかしこちらもデル・エチェ・オモ教会以上の人数で、荘厳なミサの最中であつたため、後刻再訪することにした。

曇り空にもかかわらず気温は18℃あり、シャツ一枚で快適に歩ける。昨日と同じ道を辿りイブラへ向かった。ところがサンタ・マリア・デッレ・スカール教会から坂を下って行くうちに、腹具合に不穏なものを覚えた。

下りれば、デラ・アニメ・デル・プルガトリオ教会の右手にバルがあつたはずと思うが、開店しているかは不明だ。ともかく気を引き締めて行くと、教会左手に公衆トイレが存在すると



デル・エチェ・オモ教会。

の道標に気付いた。シチリアの公衆トイレ事情は未調査であったし、無料だから一石二鳥だ。

行ってみると旧式ではあるが、きちんと整備され、清掃も行き届いたトイレがあった。便器は洋式ではなくトルコ式と云うべきか、直径80センチほどの変形楕円形の窪みに、ニカ所足を置く場所が盛り上がっているタイプだ。和式に慣れている日本人には使いやすいし、ヨーロッパの公衆トイレは、便座がないところが多いので、それより使い心地は良い。トイレット・ペーパーは用意されていないが、この点に抜かりはなかった。

腹具合の方は多分に神経的な、つまり「腸症候群」的なものなので、ともかく用を足したと思えば落ち着く。さっぱりした気分ではイブラ探訪を開始した。

大衆食堂ウ・サラチヌ

昨日とほぼ同じ路地を辿る。食堂ドゥオーモの前にはステーションワゴンが停まり、四、五人がうろうろしている。近付いてみると、業務用ビデオカメラを担いだカメラマンなどの、TV局クルーらしい。改めてこの食堂の **important** さを印象づけられた。

ドゥオーモ広場を素通りしてポーラ広場まで行き、サン・ジョゼッペ教会を三枚撮影。曇り空のため結果は期待しない。そのまま東進を続け、イブレイ庭園にぶつかる。街のサイズに見合った小振りなものだ。

見所は乏しいと感じたものの、余裕たっぷりの時間故に、園内を一周することにした。取り敢えずゲートのところで一枚撮影すると、園内のベンチに仲間とたむろしていたオバサンが、(多分)自分たちのポートレートも撮れと強要する。

魅力的とはいえないオバサン達のポートレートに食指は動か

ないけれど、撮影コストが

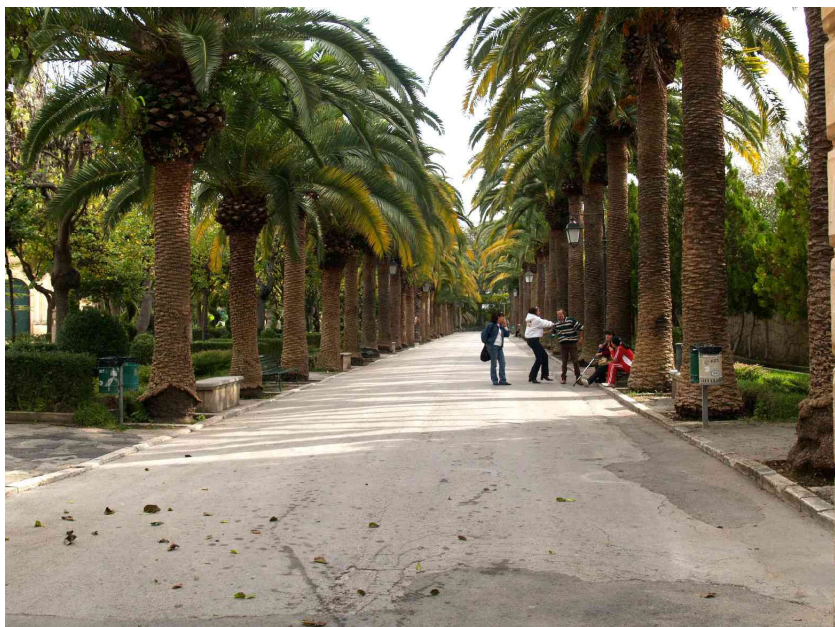
唯に等しいので、「日本・イタリア友好」のため(?)一枚奉仕することにした。どうせならばと、撮影結果を液晶モニターで見せ、サービスついでに写真送付用のアドレスも書いて貰う。後日トラパーニの少年にクリスマスカードを作成したとき、同様の処理をした。



公衆トイレ。



サン・ジョゼッペ教会。



イブレイ庭園。観光客よりも地元の人が散歩する姿が目立つ。ベンチに腰掛けていたオバサンに写真を撮れと強要された。



ラゲーサ・イブラ全景。中央右に見えるキューポラは大聖堂のもの。その右手に工事中のファサード。

園内散策を終え、イブラの中世路地を彷徨ううちに、次第に曇り空から晴れに変わっていった。イブラを照らす日射しが次第に強くなる。そんな時に家並みが途切れて、南側に昨日タクシーで通過した幹線道路が見えた。タクシーの車窓より眺めたイブラは印象的であったけれど、落ち着いて見る暇もなく、写真二枚を辛うじて撮影しただけであった。そのような欲求不満状態があった上、時刻は11時をちょっと廻ったところだから、往復1時間半を見込めば、昼飯に好適なタイミングになる。

イブラを離れてしばらくは歩きやすい道であったが、スーパーオーレからモディカへの194号線が合流すると、途端に危険なものになる。歩く物好きなどいないから、歩道が設置されていないし、緩く左へカーブしているため、走ってくる車からはこちらの姿が見え難くなっている。それに加えて路肩の藪が部分的に車道へ張りだし、視界を悪くすると同時にそれを迂回するために車の走行路を歩かなければならない。ともかくゆっくり、安全を確認しながら進んだ。

怖い思いをした割に、収穫は少なかった。イブラの全景はまずまず撮影できたものの、大聖堂のファサードが足場と安全ネットで覆われ、せつかくの景観を台無しにしている。腹の中で悪態をつきながら、それでももう少し行けば何かましになるのではと欲張り、11時半になってようやく諦めがついた。

ポーラ広場まで戻り着いたのは、まだ12時を廻ったばかりだった。早過ぎたと思いつつ辺りを見回すと、人だかりがし、壁に旗などが立てかけられ、なおも三々五々人が集まってくる。ジイサンがほとんどだけれど、壮年の制服警官もこの集団に含まれるらしい。

そのうちに揃いのスーツを着用した、十人ほどのブラスバンドもざわざわと登場し、行進が始まった。見物人はほとんどいないし、歩いている方も後ろ手に組んだままであったり、意気盛んとは言い難い。

要するに大した催しではないと見当を付けたものの、暇つぶしも兼ね



十人ほどのマーチングブラスバンド(既に通過)を先頭にパレード。

て正体を追求する。数枚写真を撮り、徒歩1分の観光案内所を訪ねた。昨日と同じ女の子がいて、中年のカップルに対応していた。彼等の用件はすぐに終わったので、デジタルカメラのモニターに先程の行進を映し出して訊いたが、彼女には判らないらしい。横から覗いたカップルの男の方が—— 警察の... ——と言葉を挟む。何か警察OBの行事らしい。

探求に成功したとは言い難いものの、時刻は12時半になったので、案内所の彼女が推奨してくれたもう一軒、ポーラ広場に面した大衆食堂ウ・サラチヌを訪ねる。まだ開店前らしいが、ドアが開いていたのでそのまま中へ入った。

おとないを告げると、奥から年配の肥満したオバサンが出てきた。案の定開店前であったが、追い出されることもなく、放って置かれることを幸いにテーブルに置かれてあったお品書きをじっくり検討する。20ページほどのもので、アラカルトもあるが、定食は「スープ」、「一番目の料理 (primi piatti)」、「二番目の料理 (secondi piatti)」、「そえもの (contorno)」、

「デザート」の各グループに、四、五種類の選択肢があり、一つずつを選んで好きな組み合わせとできるらしい。

10分ほどして姿を現したオヤジに —— ポタージュスープ、スパゲッティ・ボロネーゼ... —— と注文し始めたところ、(多分)スープとパスタは同じカテゴリーだから駄目だみたいなのをいう。そのようなことは知識として脳裏にあったので、即座に納得したものの、—— ならばお品書きの同じグループにして書けば良いのに —— の疑問は残った。イタリア人とはかなり感覚的にずれがあるのだろう。ともかく、スパゲッティ・ボロネーゼとハムのオムレツに野菜サラダと赤ワイン(ピッコロ)、ガス入りミネラルウォーターを注文する。

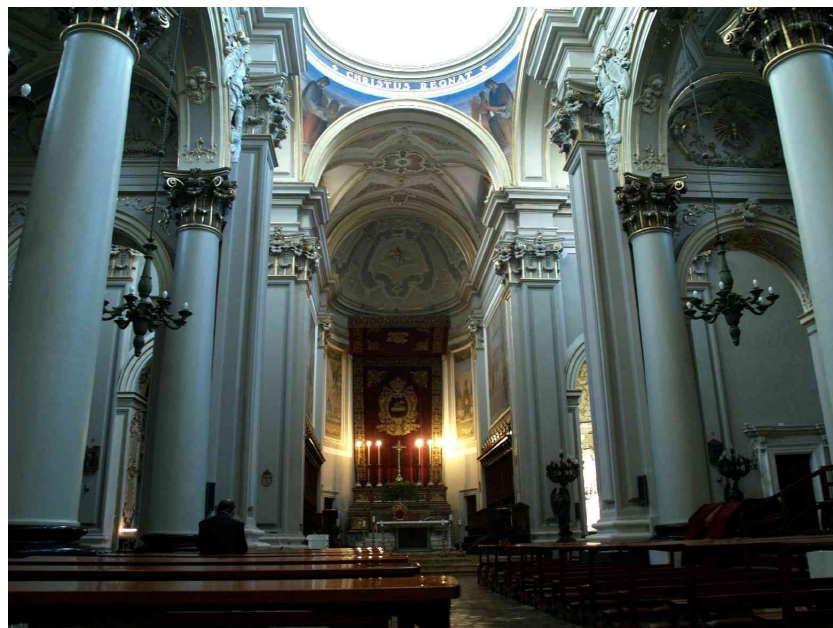
順次運ばれてくる皿は、どれも素朴な盛りつけだが旨い。分量の多いことにもかかわらず全部平らげたのは、このところ胃腸の調子が良いことにもよるけれど、やはり旨さ故であろう。最後をカプチーノで締めくり勘定は僅か13€(1,881円)。ワインを飲んでこれだから、大衆食堂は嬉しい。



左上: 席から入り口方向を見る。右上: スパゲッティ・ボロネーゼ。左下: 野菜サラダ。右下: ハムオムレツ。



左: 逗留しているホテル・ジョニオの裏手。クーラー付の部屋がほとんどない。秋冬温暖な割には、夏の平均気温が東京より低い、それでもクーラーなしは辛いのではないだろうか。右: 民家で見掛けた彫像の糞害除けだが、虜囚のようで何か可笑しかった。



大聖堂内部。

イブラのまだ歩いていない路地を拾い、その後もぶらぶらと合計一時間近く掛けて宿へ戻る。

4時を廻って再度外出する。朝方、訪れながらもミサのため内部の写真の撮ることができなかったデル・エチェ・オモ教会と大聖堂を再訪するためだ。

最初に行った大聖堂では、数人の信徒が内陣へ向かって黙々と頭を垂れていた。祈りを妨げぬよう、一番後ろのベンチを利用して撮影する。次いで訪れたデル・エチェ・オモ教会は、無人のまま静まりかえっている。しばしその静謐さを堪能した。ラゲーサ見物はこれで終わりとする。帰途インターネットカフェでメールをチェックするが収穫なし。

宿のほとんど隣といって良いスーパーマーケットに寄り、ミルク1リットル1.7€(246円)、ヨーグルト125グラム2個1.09€(158円)、ジンー壘5.15€(745円)を購入。部屋へ戻ってシャワーを浴びる。

浴室を使用して改めこの宿の古ぼけ具合に感心しカメラを取り出した。便器の水栓は締めないで何時までも流れ続ける。シャワーヘッドも数十年前に見掛けたタイプだし、その水栓が混合でないのは当然のことかもしれない。

晩酌を始めてからしばらく経ってトイレを使用したとき、節足動物が浴室の片隅にいることに気付いた。動きの鈍い奴で、数時間後に見ても数センチしか移動していない。何か世に身の置き場所もなく隙間に寓居するのよう見え、こちらの姿を写す鏡のように思えば、しんみりした気分になる。

夜中の2時半に、遠くで酔漢の叫ぶ声が聞こえた。週末のせいだろうか。これも長くは続かずすぐに静けさが戻る。



宿の浴室。左上: 便器の水栓。右上: シャワーヘッド。左下: シャワーの水栓。右下: 長さ4センチほどの節足動物が出現。

道を尋ねて

11月5日、快晴の気持ち良い朝を迎える。前日に支払いが済ませてあったので、7時10分にすんなり出立する。ラグーサ駅に着いたのは15分で、列車の時刻が42分だから随分早過ぎるようだが、早めに動いてしまうのは性分だから仕方がない。しかし当てが外れたのは駅舎が閉まっていたからだ。

発車時刻が迫ってから、慌ただしく切符を買うのが嫌だったけれど、大した問題ではない。プラットフォームに自動販売機を発見したが、ジェーラ経由カルタジローネまでの切符を購入する方法が判らない。ノートのようにコードを見付けることはできなかった。

—— 無人駅ではないから、発車時刻までには駅員が —— と云うのは、こちらでは通用しない常識らしい。列車が到着しても駅舎に人の気配は漂わず、車内精算することになった。カルタジローネまで84キロが4.8€(694円)。

通勤・通学なのか、下車した人数は多かったけれど、乗車した人は他に居らず、車内はがらがらであった。これを良いことに、撮影に当たり車窓のサイドを度々換え、窓を開け放す。つい調子に乗り、ジェーラまでの一時間ほどで40枚も撮ってしまった。枚数が多いばかりでろくな成果がないことを反省。

ジェーラ到着は定刻通りだった。地下横断通路で、駅舎の方へ行こうとすると、一緒に降りた車掌が呼び止め、同じプラットフォーム前方に停まっている列車を指差



ラグーサ駅。異国からの旅行者に電光掲示板は有り難い。点字ブロックは日本のものより使いやすそう。今まで何回か利用し見慣れたタイプの列車が到着。

TRENO N.	DATA	VELOCITÀ	POSTO N.
8700	05 - Novembre - 2005		
CLASSE	ADULTI	RAGAZZI	VALORI ORE
	ADULTI	RAGAZZI	TARIFFA
Da <u>Catania (220)</u>			
a <u>Cartaginese</u> Km <u>84</u>			
Via			
Note			
SISTEMI DI BIGLIETTAZIONE			
MILANO WA N° 5437699			
Docum. di riduz.	Mancaza biglietto	€	4,80
N.	Passaggio di classe		
In appoggio di	Completamento di tariffa		
In resta dal	Cambio Servizio/Pres. Posto		
Sostituendo il	Modificaz. Itiner. Proseguimento		
biglietto	Oblazione per trasgressione		
N. emesso da	Art. comm. reg. pol. terr.		
	Sopratassa/penalità		
In data	Detto Fisso/Maggiorezione di prezzo		
per €	TOTALE EURO		4,80
Pagate dal viaggiatore €	Resto non corrisposto Euro		(in cifre)
	(in lettere)		
VEDERE AVVERTENZE A TERGO			

車掌が車内で作成してくれた精算書(縮尺二分の一)。



左上: Vittória 方面遠望。中上: 延々と続く葡萄畑。右上: 紗が掛けられた葡萄畑。左下: ジェーラで乗り換えた列車。中下: その内部。右下: (多分石積みの)アーチ橋を渡る列車。陰から、アーチのスパンが列車一輛よりも長いことが判る。



駅前にあった看板地図。モディカの役立たずに較べれば、随分ましだが、この地図で目的地に到達することはできなかった。地図中央部に駅、左上の図外に旧市街がある。

す。お陰で荷物を持って無駄な階段の上り下りをせずに済んだ。

ジェーラからの列車も順調に走り、カルタジローネに到着したのは10時ちょっと前だった。下車した数人の中に観光客の姿はない。駅前に地図を見付けしばらく吟味したもの、行くべき方向が定まらない。通りがかりの中年男に *ufficio turistico* のメモを見せ、曖昧な返事を貰う。ともかくその方角へ踏み出した。

数分歩いて早くも不安になり、沿道の商店で女の子に *ufficio turistico* を訊き直す。彼女は知らなかったらしいが、主に尋ねたり親切に対応してくれた。どうやら針路を直角に変えた方が良さらしい。しかしそちらへ行くとすぐに家並みが疎らになり、片側が公園、反対側が学校になりその先の雰囲気は街外れだ。

折良く通りがかったオバサン二人に尋ねると、方向は間違っていないらしい。彼女らはもう少し何事か説明しようとし、言葉が通じないもどかしさに、身振りで —— 付いてきなさい —— と意思表示した。

一瞬躊躇する。彼女らの服装や化粧にけばけばしいところがあり、風俗関係の客引きを危惧したのだ。しかし善意の申し出であれば、当然受けるべきだし、躊躇した理由を察知されれば(まず間違いなく不当な危惧だから)著しく感情を傷つけることになる。 —— 真昼の公道で拉致されることもあるまい。成り行きで途中から方針変更は可能だ —— と考え、彼女達に従った。

ごく小さな峠を越えると、再び家並みが増える。いくらかも行かないうちに博物館があり、そこが目的地であった。彼女等はそこのスタッフか関係者らしく、受付辺りにいた数人と親しげな挨拶をすると、英語の話せるスタッフに話を引き継いだ。彼は流暢に話すだけでなく、デスクから市街平面図を取り出し、駅と現在位置、そして旧市街の中心部と観光案内所の関係を、手際よく説明してくれた。丁度中間点付近にいるらしい。

礼を述べ、 —— せっかくだから展示を見たら？ 無料ですよ —— と勧めてくれるのを、 —— 明日一日フリーだから、その間に. . . —— と断り、ともかく宿の確保を優先する。博物館を出て、最初の交差点で案内所への道標を発見し、物事の流れが一挙に好転したことを実感する。



上：博物館の看板。下：案内所への道標を見つけた。

緩い上り坂が始まり、持参のテープを取り出し肩掛け牽引スタイルで頑張った。歩道の平板ブロックは凸凹が少なく歩きやすい。

10分ほどで旧市街の中心といえるウンベルト広場、そこから路地を僅かに入った二階に観光案内所があった。中年の男女二人、女性の方はほとんど英語を喋らず、男性の方もカタコトに近いけれど、それを補ってあまりあるホスピタリティーに富んだ人達であった。

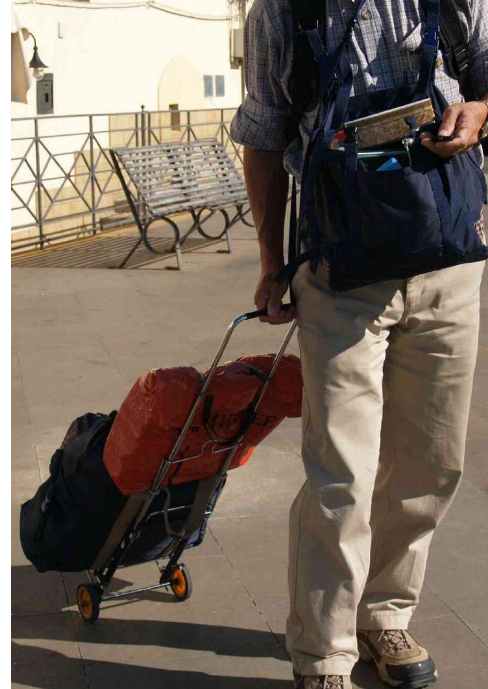
改めてA1サイズの市街平面図、その他資料一式の入手、さらにホテルリストの宿で、この界隈にあるものを平面図上にマークするよう頼んだ。彼は単にマークするだけでなく、宿の名前までフェルトペンで書き込んでくれた。

宿を探しに歩き回るあいだ、キャリーの荷物一式をこの場に置いてゆくことも、快諾してくれた。随分身軽になれて有り難い。まずは徒歩3分の貸部屋(B&Bと似ているが朝食がない)を訪ねた。

インターホンには流暢な英語で反応があった。エレベーターはなく、二階にカウンターを備えたフロントがある。そこにいた禿げ上がっているが多分三十前の若い男がオーナーらしい。一泊35€(5,064円)の部屋は、半屋根裏だけれど、小さなバルコニーも付いて広々している。建物自体は古いが全面的に内装を手直してからは日が浅いようだ。

彼の人柄が良さそうなどころも含めて気に入った。二泊を即決しチェックインする。手続き中にフロントの奥からちらりと姿を現した、乳飲み子を抱く婦人はオーナーの連れ合いらしい。アットホームな雰囲気が漂う。

結果論的にいえば、一軒目の宿に決めてしまったので、荷物を預けたのは失敗のようだが、そうは思わない。他も選択できる自由度の高い状態で決められたことに満足しているからだ。ともかく案内所に戻り、荷物を受け取る。札をいいながらついでにお勧めのレストランも訊いてみた。幾つかあるらしいので、メモホルダーを差し出すと、判読しにくい文字で四軒の名前を記してくれる。12時にカルタジローネ探訪を開始した。まずムニチーピオ(市役所)広場から街のシンボリックなサンタ・マリア・デル・モンテの階段を登る。この142段は蹴込み板に多彩なマジョルカ焼きのタイルが使われ美しい。毎年7月24、25日にはこの階段に4,000個の彩色提灯が、年毎にパターンを変えて並べられ、幻想的な光景が出現するとか。



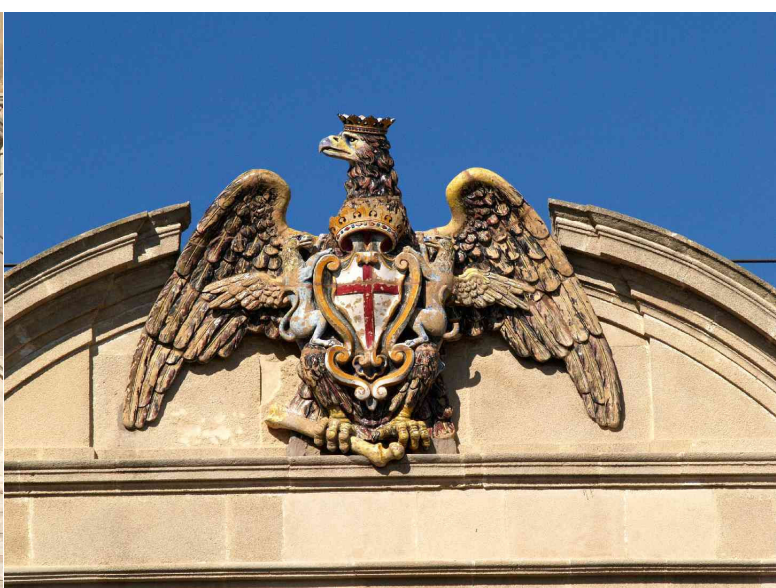
肩掛け牽引スタイルで頑張る。



泊まった部屋。



サンタ・マリア・デル・モンテ階段の上から。



サンタ・マリア・デル・モンテ広場のセラミックパネル。

セラミック芸術協会のシンボル。



左：(買い物か何か)依頼した品物を受け取るため、4階から下げたロープをたぐり寄せる婦人。右：ノートとは様式の異なるバルコニー。

階段の上は小さな広場になり、正面にロッカ・ディ・ユーディカの戦勝記念セラミックパネルがある。右手には素朴な感じのサンタ・マリア・デル・モンテ教会。創建はビザンチン末期らしいが、地震の被害を受け、1693年に再建されたもの。

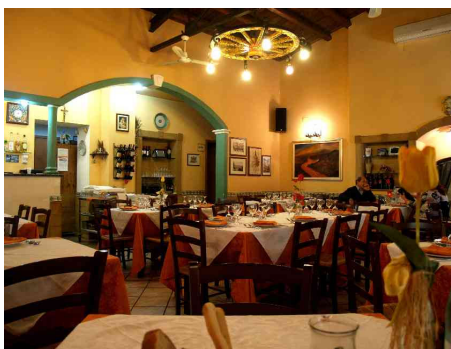
教会の脇を抜けて北へ向かう。曲がりくねった石畳の路地を抜けて行くと下り坂になり、正面にセラミック芸術協会の建物が見えた。カルタジローネは良質な粘土を産するため、先史時代より焼き物が盛んであったらしいが、それを集大成するように1918年に設立されたとか。

芸術協会を過ぎると急に場末の佇まいになる。そろそろ時刻も12時半近くになったので、適当に面白そうな路地を拾いながらムニチーピオ広場の方へと移動した。案内所お勧めのレストランを下見するつもりだ。

四つのうち二つは見付からず、一つは好みではなかったので、結局入ったのはラ・ピアツェッタだった。1時前にもかかわらず、既に先客が二組いた。若いウェイトレス二人はオヤジの身内を感じさせる、要するに家族経営の店らしい。

アラカルトから選んだけれど、一昨夜の学習から、とにかく二番目の料理まで注文する。サーモンのパスタに、子牛肉のシチュー、ミックスサラダ、そしてワインは赤をピッコロにした。

店内の内装はますます趣味の



ラ・ピアツェッタ。ちょっと変わったパンが三種類。ツマミに好適だった。下左：サーモンのパスタ。右：仔牛肉のシチュー。

良いものだが、高いところに大型テレビが置かれ、イタリア流ワイドショーか何かを流しているから、高級店とは言い難いだろう。幸い背中側の側にあっただけで、映像を無理やり見せられることもなかったし、喋っていることはさっぱり判らないので、下らぬ言辭の応酬に悩まされることもなかった。

1時半ころになると次々と客が訪れる。土曜日ということもあろうけれど、人気の店らしい。実際ウェイトレスの感じも良いし、料理も旨い。それぞれ量的にはかなりたっぷりあったのに、残さず平らげた。一時間ほどの食事を楽しみ、料金は席料1€(145円)、サーモン・パスタ7€(1,013円)、仔牛シチュー6.5€(940円)、ミックスサラダ2.5€(362円)、ミネラルウォーター(炭酸)1.5€(217円)、ワイン3€(434円)であった。

宿へ戻って食休みの後、再び外出したのは3時をだいぶ廻っていた。昼飯前には高台の方を歩いたから、反対の東側へ針路を取る。相変わらず雑踏するムニチーピオ広場を抜け、ウンベルト広場で大聖堂を見上げるが素通りした。



滑車とロープを使って洗濯物を干すのは、スペインやポルトガル、ギリシャでも見掛けるが、国によって少しずつ異なるようだ。イタリアで見れば「ナポリの旗」がまず脳裏に。



広場から始まるローマ通りを行くとすぐにサン・フランチェスコ橋を渡る。1627年に架けられた石積みの橋は二つの丘を繋ぎ、窪地をまたいでいるだけで、川は流れていない。馬車を使用しなかった日本ならば存在し得なかつただろう。

午前中登ってきた坂を下り、途中から通りに沿った細長い公園に入る。小さな丘を利用し、頂部は明るく開けた空間に、麓部分は茂みの中に遊歩道が錯綜している。この公園を東に抜けると、午前中に道を教えて貰った博物館の前に出た。

あれ以来の色々が上手くいった報告がてら、勧められた展示を見るつもりも少しあって此処まで来たのに、4時前にもかかわらず正面の扉は閉ざされていた。期待はさほどなかったもので、公園の中を引き返す。



左上: サン・ジュリアーノ大聖堂。鐘楼は1954年に建てられた。右上: サン・フランチェスコ・アッリンマコラータ教会。シチリア・バロックの典型。左下: 小劇場。かつてはバルコニー席上部からセラミック博物館に入ることができた。右下: サン・フランチェスコ橋。



サンテリア館。ローマ貴族の邸宅。

サン・ジャコモ・バシリカ。

サン・ボナヴェントゥラ教会前から大聖堂遠望。

サン・フランチェスコ橋をくぐり、しばらく行って狭い路地の急坂を登る。由緒あるものはないけれど路地の雰囲気が好き。坂を登り切ると宿のあるビットリオ・エマヌエーレ通りだった。宿の前を通過して50メートルほどのところにサン・ジャコモ・バシリカがある。夕日に映える鐘楼を数枚撮影していたら、暇そうに見物していたジイサンが *cinese* (チネーゼ: 中国人) か *giapponese* かと訊く。シチリア辺りでは中国人の方が一般的なのかもしれない。

バシリカの山側を通る坂道を行くと、サン・ボナヴェントゥラ教会の前に出た。教会の大扉は閉ざされていたが、小高くなったそこからは、夕日の色に染まってゆく街が鳥瞰できる。人通りも全くないまま静かな夕景を楽しんだ。

教会前の道を行くと下り坂になり、やがて見覚えのある場所に出た。ムニチーピオ広場だ。サンタ・マリア・デル・モンテ教会前辺りを期待していたのだが、階段を登れば済むことだ。

142段を2段ずつ速歩で上がって行くと、すぐ前を同じような上り方をするジイサンがいる。別に競い合うつもりはないけれど、年に似合わぬ健脚ぶりに舌を巻く。彼は休むこともなく登り終えると、すぐ向きを変えて降りていった。このようなトレーニングを日課にしているらしい。

階段の上でしばらく暮れゆく街を眺めた後、ほぼ水平に走るマトゥリーチェ通りを西へ向かった。突然視界が開け、シルエットに近くなったキューポラと、刻々と明るさを失ってゆく茜色の残照が目に入った。

慌ててカメラを構えて一枚。しかしそこでカメラのメモリーがいっぱいになりそれ以上撮影できない。予備のメモリーは持参していたが、あまり必要もあるまいと、背中中のデイパックの中であった。もどかしい思い出それを取り出し、カメラのメモリーと交換するが、気が急いで手際よく行かない。次の一枚を撮影できたのは4分後のことであった。

ただ撮影に心を奪われ、目の前のキューポラがサン・ジャコモ・バシリカのものであることや、撮影地点がサン・ボナヴェントゥラ教会の裏手であることなどに気付いたのは、随分後のことであった。



サン・ジャコモ・バシリカのキューポラと夕焼け。

一旦ムニチーピオ広場へ戻り、買い物をする。ヨーグルト125g 2個1.96€ (284円)。宿のそばまで戻ってから買い忘れに気づき、そばの食料品店へ行きミネラルウォーター(炭酸)1.5ℓ 0.5€ (72円)。

部屋に戻ったのは7時を廻っていた。バルコニーの向こうは数メートル離れて民家のバルコニーで、丁度向かい合う位置が居間らしい。テレビの音や家族の会話、や

がて食事が始まった様子だ。晩酌を始めようと浴室に備え付けのコップを見ると、底が丸くなっていて正立しない。仕方なくフロントまで降りて、プラスチックの使い捨てコップを貰ってくる。

向かいから聞こえてくる家族のざわめきを肴に晩酌をやる。健全な家庭なのか、深夜まで騒ぐようなこともなく、しじまの中で熟睡することができた。

共同墓地

目を覚まし、時計を見ると8時になっていた。夜間には強い雨音を聞いたように思うが、バルコニーから見上げると青空だ。身支度を整え表へ



黄昏のムニチーピオ広場。

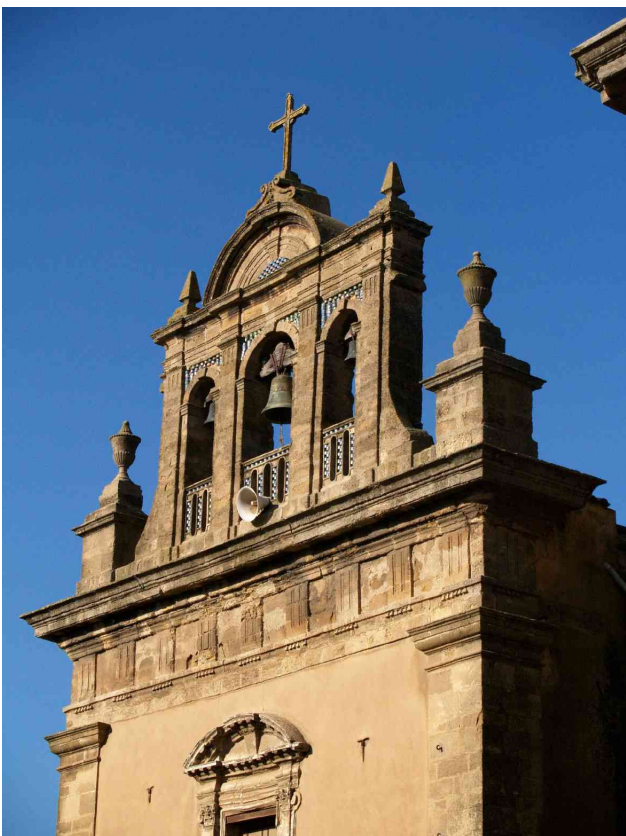


浴室に備え付けのコップは専用コップ受けがないと転がってしまう。

出ると、街路のあちらこちらに水溜まりが残っている。夢を見ていたわけではないらしい。

1分も歩かないうちに営業しているバルを見つけて寄る。カプチーノ一杯1€ (145円)を、椅子、テーブルもあつたけれどカウンターで立ち飲みし、すぐに店を出た。先を急ぐ必要もないけれど、気持ちの良い朝には思い切り歩いていた方が心地よい。とりわけこの日は、18℃でシャツ一枚が適当な気温に加え、昨夜の雨によるものか空気が澄んでいるように感じられる。

ローマ通りを駅へ向かった。最短経路を逡巡することなく歩けば、どの程度時間が掛かるか確かめておきたかったことと、カルタジローネの旧市街は離れて見ると驚が羽根を拡げているようだとの「芸術と歴史の島 シチリア」記述が気になったためだ。



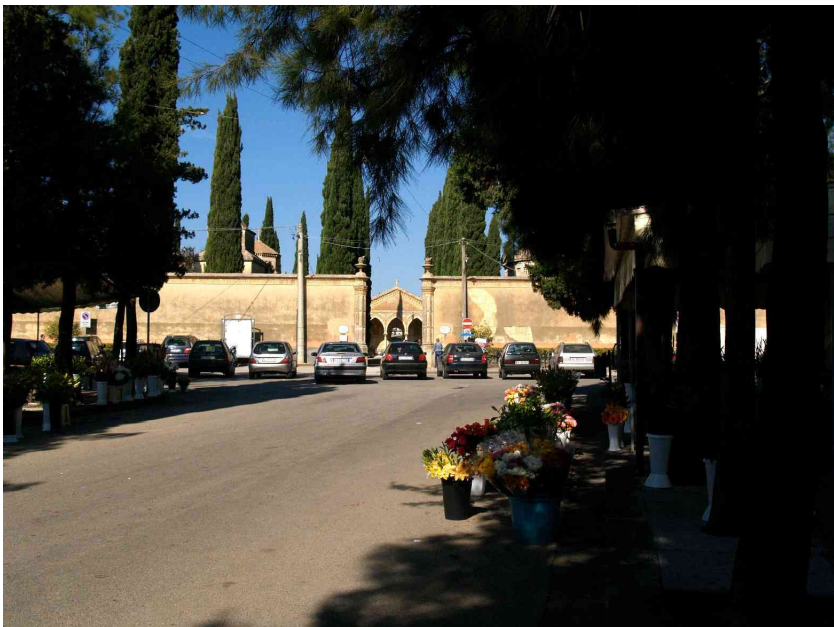
聖アガタ教会。



駅前の馬車。馬の頭に着けられた飾りはシチリア的というべきか。

駅まで普通に歩いて半時間を見込めば良さそうだ。ついでだから次の目的地候補、タオルミーナへの列車時刻を調べてから、バルの様子を覗く。カウンターと広々したフロアに数セットの丸テーブルとパイプ椅子は、スペインで見た駅のバルと良く似ている。ともかくそれほど喉が渴いていたわけではないが、カプチーノ1€(145円)を一杯貰う。

駅舎を出、昨日も見た看板地図でカルタジローネを遠望する候補地を物色し、駅から東北東の方向に比較的大規模な(遺跡の類を思わせる)パターンを見つけた。これ自体が面白ければ儲けものだし、小高そうな予感がしたので、ともかくこれを目指す。



共同墓地正門前には花屋が多い。

124号線を渡ると、舗装こそされているものの、センターラインもないような長閑な道になる。その割には通行量が多いと思いつつ、小さな峠を越えたところで、前方に屋台を設えた箱型車や行き交う人が見えた。やはり遺跡でもあるのかと近付いて行くと、何か雰囲気が違う。

正装までは行かないにしても遊び着姿はなく、花束を手にした人もいるし、尼僧も数人見掛けた。高さ4メートルほどの塀で囲われた中に何かがあるのか、ともかく皆が出入りする門から入って見たが、地味な建物があるばかりでなにやらさっぱり判らなかつた。

さらに内側にある小ゲートを抜けてようやく共同墓地であることに気付く。以前スペインを旅した際に、ア・コルーニャの墓地で写真を撮ったところ、墓守にたしなめられたことが脳裏によみがえり、撮影は自粛する。

墓地の奥は小高くなり、地形的にはカルタジローネ撮影に向いていそうだが、塀が障害になる。加えて此処が物見遊山の場ではないことを考えれば、早々に退散した。

墓地前の道路をさらに東へ進むと、次第に下り坂になる。ようやく墓地の塀が途切れたところで、民家へと続く私道に入り、庭に出ていた住人に許可を求め、ようやく何枚か撮影することができた。



共同墓地の東側から見るカルタジローネ。

10時半を廻ったので意識の重心が食事の方へ移動して行く。これ以上良好な撮影地点もこの付近に求めることは無理らしい。まっすぐ帰ってしまうとあまりに早過ぎるので、一応テーマを「カルタジローネ遠望」とし、寄り道を繰り返しながら、旧市街へ戻った。

概ね122号線を辿ることになったのは、見晴らしが良かったためだ。幹線道路を歩く味気なさはあったけれど、比較的交通量が少なく、歩道も整備されていたからあまり不愉快な思いや怖さを感じることなく旧市街の麓へ着いた。

随分時間調整しながら歩いたつもりでも、レストランの開店時刻には早過ぎ、部屋で一休みして



左上:122号線から。右上:休業日のガソリンスタンドは、バリケードもなければロープを張ることもしない。左下:共同墓地のある丘を旧市街から。右下:洗濯物は寝間着なのだろうか。

から出直した。昨日と同じラ・ピアツェッタだ。昨日の今日で、その上当方の風貌はあちらでは異質だから、オヤジと若いウェイトレスは覚えていて笑顔で迎えてくれた。

まだ時刻が早いのに先客が二組、その上予約席と札が立つテーブルも多い。やはり日曜日のせいだろうか。中年のウェイトレス二人は新顔で、多分混雑に備えてのパートタイマーだろう。昨日と同じ席に着き、多少見慣れた感じのするメニューから、キノコの Pasta、ミックスサラダ、豚肉のキノコ詰め、ミネラルウォーター(炭酸)に赤ワインをピッコロで。

昨日と同じスナック風パン(P. 110下写真参照)をつまみに赤ワインを呑んでいるあいだにも客は続々現れ、メインディッシュに取りかかった頃は、50人入りそうな店内がほぼ満員になる。そうなると、空いているときは使用しない別室があるらしく、カーテンをくぐってそちらへ行く客が相次いだ。パートタイマーが必要なのも納得できる。



上:キノコの Pasta。下:豚肉のキノコ詰め。



上:ラ・ピアツェッタの店先。下:店の斜向かいでテーブルクロスや、ナプキンなどの洗濯物が干されている。日本では見掛けない長閑さだ。

キノコパスタは旨かった。茹で加減とソースの馴染み、そしてキノコの風味が良い。アルデンテよりは柔らかいだろうが、このソースにはぴったりだと思う。日本でアルデンテでないと許せないようなことをいう人がいるけれど、本場ではどうなのだろうか。

豚の方もご機嫌であった。脂身がしっかり着いているのは半分ぐらい残したものの、あとは綺麗に平らげる。このような料理を日本で食べたことがないから確信を持ってないが、肉がともかく違うような気がする。ミックスサラダは標準的な出来栄ながら、二品のサイドディッシュとして適当であったから、この日も満足の昼食だ。ますますこの店が好きになる。

最後にカプチーノを貰い、勘定は席料1€(145円)、パスタ7€(1,013円)、豚肉6€(868円)、サラダ2.5€(362円)、ミネラルウォーター1.5€(217円)、ワイン3€(434円)、コーヒー1€(145円)、締めて22€(3,183円)は安い。



西側から遠望するカルタジローネ。4時11分。

夕景を求めて

部屋で食休みして、3時半を廻ってから出掛けた。夕日に輝くカルタジローネを撮影したかったためだ。そのようなわけで西へ向かったものの、意外に難儀した。すんなり西へ行く道が見付からず、当初は西へ向いていたのに、何時の間にか大きく迂回して街の方へ戻ってしまう。数回失敗したあとで、何とか街の全景を眺めることができた。

前方1キロほどのところが小高くなり、その辺りにある小集落まで道は続いている模様だ。そこからの眺望にさらなる期待を抱いて歩き出し

た。ところがいくら進まないうちに、雲が夕日を隠してしまう。振り返っても灰色の街が、時刻も判然としない風景として見えるばかりだ。

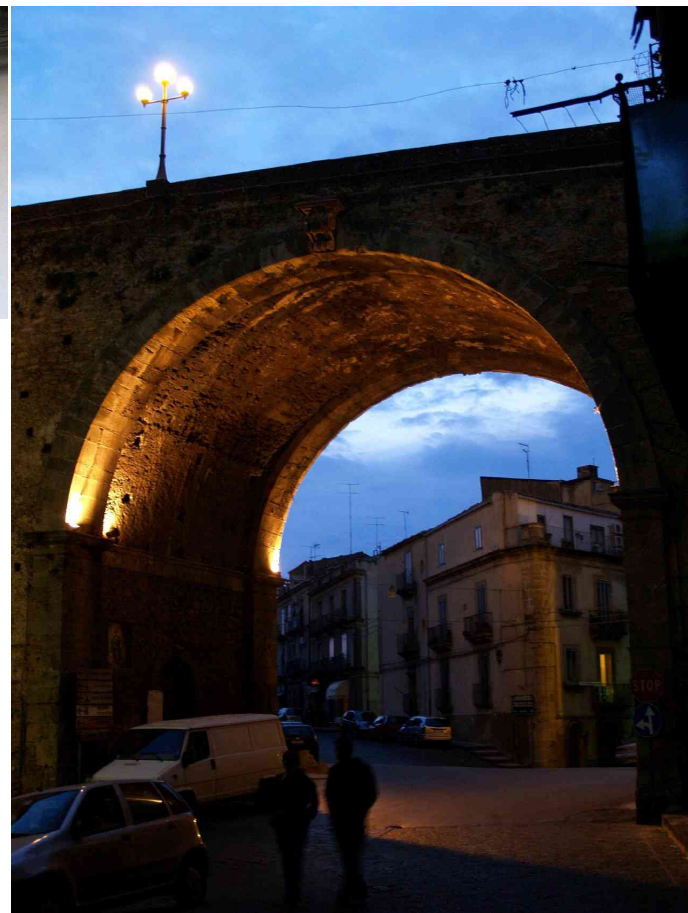
—— 急に雲が湧き上がったならば、吹き払われるのも急かもしれない —— と侘びしい望みを捨てずに歩いたが、かなえられなかった。道はさらに西へ延びていたものの、下り坂が続いているので、すぐに街が見えなくなることは明白だ。収穫なしと諦めて引き返すことにした。



コンクリート擁壁にペットボトルが埋め込まれているのは、フェンスなどの支柱を建てるためらしい。



排水管のトラップが露出している。トラップがあったときはメンテナンスが楽かもしれないが。



サン・フランチェスコ橋。5時16分。

来た道をほぼ忠実に戻り、市街へ入ったときは既に黄昏れていた。一応ウンベルト広場などを廻って宿へ帰った。夕景を撮り損なった欲求不満や、宿と街の居心地良さ、ラ・ピアツェッタの料理、そしてこれから先の行きたい場所不足などから、此処にもう一泊することにして、丁度フロントにいたオーナーに申し出る。勿論シーズンオフだから —— 予約で満員 —— などということもなく、あっさり延長できた。

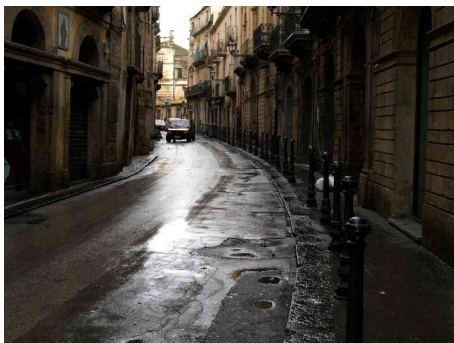
もう一泊するので、シャツを洗濯できないか訊く。職住接近の家族的経営ならば、ちょっと洗濯機に放り込んでくれないかとの安易な考えであったが、彼の答えは —— 残念ながらそのようなサービスはしていない。しかしウンベルト広場のそばに良い洗濯屋がある。それを利用するのが一番だ —— といったものだった。ほぼ間違いなく言葉の通じない店で、「その日のうちに仕上がることを確認してから洗濯を頼む」のが億劫で、この件はなかったことにする。

ついでにフロントのすぐ内側にあるPCでインターネットに接続させて貰う。メールチェックと鉄道ダイヤの調査を目論んでいたが、なぜかADSLが不調で繋がらない。 —— ADSLも日曜日かい？ —— など、詰まらぬ冗談をいって諦めた。

洗濯屋

小鳥の囀り声で目を覚ました。住宅密集地域なので驚いたけれど、街の規模が小さいから、周辺の林からでも、翼持つものにとっては一飛びなのか。再び夜のあいだに雨が降り、朝には上がる

パターンが繰り返されていた。8時40分にシャツをデイパックに詰め込んで出掛ける。昨晚呑みながら考えて、「洗濯は洗濯屋に頼むのが正しい」と、考え直したのだ。ホテルのランドリーサービスにしても、実際の洗濯は外注しているであろうし、それならば時間に余裕のある人間が直接持ち込むのも不自然ではあるまい。シチリアの洗濯屋利用法を調べることも面白い。



路面には水溜まりが残り、雲の動きも速く、青空が拡がる部分と、雲が立ち込めるところが混在していた。



洗濯屋。

生憎フロントにオーナーは居らず、替わりにいた学生風の女の子は、親切ではあるものの、肝心の洗濯屋については知らない。

しかし洗濯は必須のことではないから、気楽に行く。観光案内所を訪ねると、9時ちょっと前にもかかわらず、開いていた。中ではオバサンが掃除機を掛けている最中で、担当者らしい中年婦人は席に着く前であったのに、それでも親切に対応してくれる。彼女は近辺の洗濯屋を知らなかったらしいが、奥のスタッフに訊いたりして調べ出した。地図にマークして貰った結果は、ウンベルト広場の外れといっても良いような所であった。

洗濯屋へ直行する。店内は入り口の所にキャッシュレジスターを置いたカウンター、その隣にアイロン台があり、奥の方には数台のドラム式大型洗濯機、カウンターの反対側にはハンガーに掛か

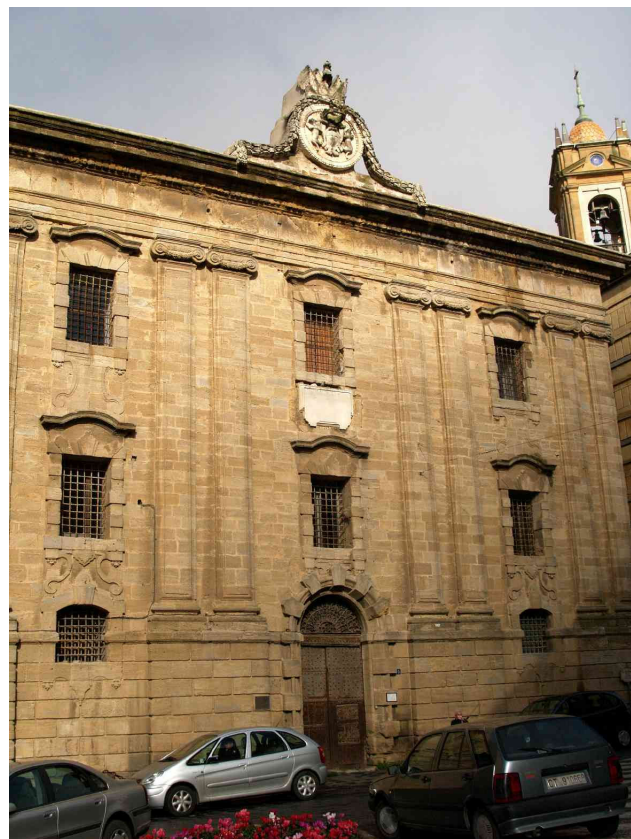
った仕上げ済み洗濯物など、日本の個人経営洗濯屋と大差ない。

対応してくれたオバサンは勿論英語など話さないけれど、シャツを出されれば用件は明らかだ。後は電子辞書の助けなど借りながら —— 今日中に受け取りたい —— ことを伝える。通常は客が書くのであろう、住所、氏名、電話番号などの欄がある伝票も、オバサンが代行してくれた。物わがりの良い人だ。最後にもう一度5時に引き取れることを念押しして店を出た。

すぐ隣にある、元は監獄の市立博物館の写真数枚を撮って、宿へ引き返した。洗濯物に関しては —— 早く預けた方が即日の受け取りを確実にするだろう —— と考えていたが、このまま街歩きを開始すると、昼前に行き所を失いそうに思われた。それに文字通りの雲行きも、もう少し待った方が良くなりそうであった。

部屋で旅の資料(切符やレシート、パンフレットなど)を整理してから、ベッドに寝転がって「芸術と歴史の島 シチリア」で今後の旅程をあれこれ考え、それに飽きると、成田で買った杉本苑子著「おくのほそ道人物紀行」のページを捲る。

11時を廻って、頃やよと外出する。ウンベルト広場からローマ通りは、今やすっかり馴染んだ道筋だ。期待通り青空が拡がり、真っ白な雲が次々と浮遊してダイナミックさを添える。気温は既に20℃近くあり、シャツの袖を捲って歩くのが快適な状態であった。途中でとどまることもなく、一気に駅前を通過し、昨日から目星を付けている間道へ入った。



上:ブルボン時代の監獄が現在は現在、市立博物館と絵画館として利用されている。下:その入り口と窓。

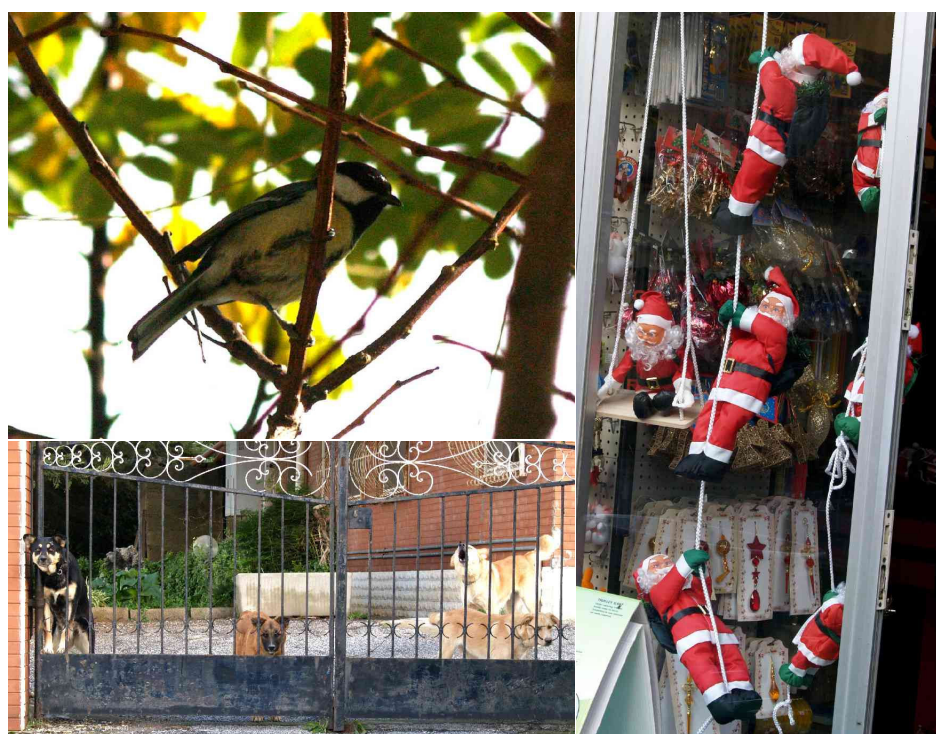


間道から眺めるカルタジローネ市街。左側の高台にサン・フランチェスコ・アッリンマコラータ教会、右側の高台にサン・ジュリアーノ大聖堂。中央のスカイラインが一番低くなっているところが、(右側の旧市街と17世紀の新興住宅街を結ぶために作られた)サン・フランチェスコ橋。



位置的には旧市街と共同墓地の丁度中間になり、昨日は休業日だったガソリンスタンドの前を通る道だ。歩道はないけれど、相互一車線でセンターラインもない上に交通量が少ないので、車両は歩行者を充分迂回して走る。

ほぼ一定の勾配で下る坂を、右手にカルタジローネを見ながら歩く。高さと方角により、微妙に変化して行く景観は面白い。しかし、変化の要因としてさらに背景の雲、街に太陽が投げかける光が、流れる雲によって遮られる陰影、レンズをズームさせることによる画角まで組み合わせると、どこが最上のアングルで、何時がベストのタイミングなのか、訳がわからなくなってくる。



左上：街路樹に止まる小鳥。左下：沿道の犬に吠えかけられる。右：おもちゃ屋ではクリスマス商品が並び始めていた。

闇雲にシャッターを切ったが、「最高傑作」をものにしようとするほどの根性もなく、20分掛けて坂を往復すると「カルタジローネ遠望」はひとまず切り上げることにした。

駅前商店街を抜け、ローマ通りに平行する公園（Giardino Pubblico: ジャルディーノ・プブブリコ: 直訳すれば公共庭園）を散策する。途中、一昨日世話になった博物館の前を通ったが、この時も閉館していた。

三回目のラ・ピアツェッタ

一旦宿へ戻って一休みした後、この日も開店間もないラ・ピアツェッタを訪れた。三日連続だから、迎えるオヤジの笑みにも一層の親しみがこもっているようだ。同じテーブルに着席すると、幾分余裕を持ってメニューを吟味する。

ウェイトレスは初日と同じ女の子だけで、パートタイマーのオバサンはいない。彼女等には漠然と不愉快な思いを抱いていたから結構なことだ。アンチョビーのパスタ、焼き物盛り合わせ、赤ワインのピッコロを注文した。さらに昨日隣のテーブルにホウレン草の炒めが出されていたので、電子辞書で調べた Spinaci を見せると、何とか通じたようだ。

先客は三組だけで —— 月曜日（平日）ならばこの程度に空いているのか —— と、なおのこと寛いだ気分で食事を楽しんだ。ところが2時を廻った頃、大学関係者風といった雰囲気グループが十六人で押しかけ、その後も三々五々客が続く。結局この日もほぼ満員になった。

料理が旨くて値段が安く、その上客あしらいが良ければ、繁盛するのは当然かもしれない。しかし始めて訪れた街で、そのような店を利用できたのは、ひとえに観光案内所の彼が勧めてくれたからだ。改めて感謝する。この日の勘定は締めて21€（3,038円）であった。



左上：アンチョビーのパスタ(Gli spaghetti acciughe)。右上：ホウレン草。下：焼き物盛り合わせ。



石炭ストーブ。シチリアではまだ現役らしい。

ジャガイモの網袋売り。1キロ1・小型(仔?)馬に馬車を着けてドライブを楽しむらしい。(145円)らしい。

4時近くなって黄昏れ始めた街へ出る。暮れゆくカルタジローネ撮影のために、場所は午前中に遠景写真を撮ったところと決めていた。急いで行っても暮れ始める前に着くばかりだから、街の様子を観察しながらのんびりと歩く。

幹線道路から間道に入り、坂を下って行く途中、家畜輸送用中型トラックから、馬を引き出して馬車に着けようとしている連中に出会った。昨日も馬車を二台見掛けたから、この街では自家用スポーツ馬車が流行っているのかもしれない。しばらく見物し、写真撮影の許可を求めると、笑いながら肯いて、ついでに「中国人か?」と、訊かれる。

さらに坂を下り、午前中の撮影地点に到着。時々刻々次第に赤味を増し紅色に近づき、やがて彩りを失って行くのを約二十枚ほど撮影。下の写真は4時54分。



帰り道、駅前のスーパーマーケットでプロセスチーズ1.49€(216円)、ヨーグルト125g 2個1.49€(216円)、ジン1本5.19€(751円)、レジ袋0.04€(6円)など。旧市街へ戻って、洗濯屋に寄りシャツを受け取る。料金は3€(434円)だった。店を出てシャツの香りを嗅ぐと、やはり僅かながら洗剤が感じられた。

宿のそばまで戻ってから、明日の朝食替わりを調達。食料品店で、パン0.3€(43円)、ミルク500cc0.75€(109円)、ミニトマト0.2€(29円)など。宿のフロントで三泊分の料金105€(15,191円)を清算する。鍵は明朝フロントのカウンターに置けば良いといわれた。

イタリアのぼったくり国際電話

11月8日も好天気が続いている。6時45分に、打ち合わせ通りカウンターに鍵を残して宿を出た。駅まで行くのに、荷物を引っ張って行けば半時間以上かかるかと思っていたのが、意外に呆気なく終わり、タオルミーナまでの切符140キロ6.7€(969円)を自動販売機で購入すると、半時間以上を持て余すことになった。

このような状態になるのは珍しくないもので、駅内外やバルを仔細に観察して行く。公衆電話とそれに貼られたステッカーを見て、しばらく自宅に電話していないことを思い出した。時差から掛けるに手頃な時刻だし、このステッカーの番号を利用することにした。電話そのものはスムーズに繋がり、短時間の通話で用事は終わった。これがとんでもない電話と判ったのは帰国後随分経ってからで、詳細はコラムをお読みいただきたい。

閑話休題。電話を終え、乗車券に日時の刻印をすると、本当に何もすることがなくなり、あとはひたすら列車の到着を待つ。気温は17℃で風もなく、呆然と佇んでいるにはまずまずだ。到着までに数分の遅れがあり、さらに(単線のため)ジェーラ方面との列車交換で待たされる。結局発車したのは7時56分になっていた。

ボッタクリ国際電話

ここ数年、海外から日本への電話は、利用可能であれば Global Tel というアメリカの会社を利用している。安い上に便利な機能が付加されているためだ。しかしイタリアの公衆電話からはなぜか利用できないことが判明した。

そのような可能性も考慮していたので、KDDIをホテルの電話が利用できず、それでも日本との通話が必要ときは利用した。これは多少割高なことを別にすれば、不満というようなこともなかった。

しかしイタリアに一ヶ月もいて、当地の電話会社がどのようなサービスを提供しているのか、一端にさえ触れず日本のサービスに頼っているのは情けないようにも思えた。多少高価であるにせよ、使って判ることだし、紀行文の材料として多少の無駄な出費も良いだろう。どの公衆電話にも定められた位置に貼られているステッカーが、クレジットカード利用の国際電話を日本語で案内していることも手軽そうなイメージを与える。

数回利用して帰国後、カードの請求書を見て驚いた。総額20,097円は、数分間の通話料金としては法外だ。請求は CALL FROM ITALY などところからなされ、電話会社などの公的企業ではないらしい。

取り敢えずカード会社に明細を要求した。通話時間は僅かだが This charge represents costs incurred in making an international Operator assisted telephone call.と、言い訳がましく、(利用するしないにかかわらず)交換手の補助を受けられる通話のコストだと書かれている。

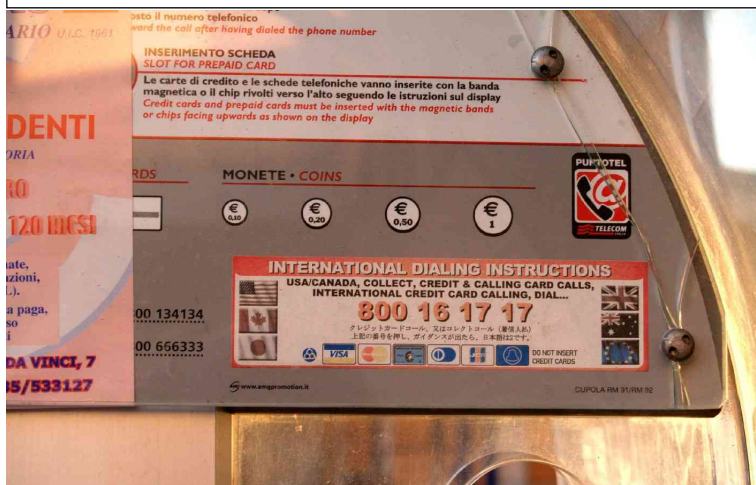
しかし実際の利用に際しては、テープ音声の英語が「英語か日本語の選択」切り替わって、テープ音声の日本語で「カード番号、有効期限、パスワード、相手先電話番号」などの入力指示が流れるだけで、交換手を利用するチャンスなどない。

カード会社は当初、「利用していないならともかく、実際に利用して不満があるならば、直接相手と交渉を」という。これは全く馬鹿げた話で、詐欺まがいの請求をする相手に、費用自己負担で国際電話し、電話代丸損が見え透いている。ともかくカード会社の担当者に、いかに不当な請求であるかを説明した。

何回かの折衝後、担当者は「不当請求であると相手に通告するが、相手側にも異議申し立ての権利があり、その期間三ヶ月を過ぎて(可能であれば)取り消しが成立する」との説明だった。

この時点で「6月頃に決着すれば良いか」と考えた。ところが4月20日付けの文書が届き「ご請求代金の取り消し申請が成立いたしましたことをご報告申し上げます」と記されている。そして全額取り消しだ。

これも無茶な話で、数分にせよ国際通話したことは間違いのない。不当に高額な料金を不服としたので、妥当な料金を支払うことは当然と考えていたのに。



日本のピンクチラシなどと異なり、綺麗に印刷されたステッカーがきちんと貼り付けられ、電話会社のサービスかと錯覚させる。